リレーメルヘン⑫

虹色の幸せ

敦賀市立図書館・各務原市立中央図書館

はじめに

これは敦賀市の小学生と、友好都市である各務原市の小学生が、前編・後編をリレー式につないで作った物語集です。

敦賀市の小学生が前編を、各務原市の小学生が後編を、お互いに顔を合わせることなく書きました。

さあ、十七の物語のいろいろな世界をお楽しみください。

もくじ

1　虹色の幸せ　黒河小・陵南小　……1
2　世界最強のエスパーをつかまえろ！　粟野小・那加第二小　……13
3　ぐりの大冒険　粟野小・那加第三小　……27
4　四たんてい事件ファイル　粟野南小・八木山小　……39
5　消えたお菓子の謎　沓見小・尾崎小　……54
6　ぼくらは　秘密探偵団　松原小・各務小　……67
7　アユのクラウドワールドへの挑戦　常宮小・鵜沼第一小　……80
8　Ｇｉｆｔ　松原小・川島小　……96
9　恐竜島のなぞ　西浦小・蘇原第二小　……112
10　二人だけの秘密　赤崎小・那加第一小　……127

11 アリの巣いじりはいけません　東浦小・緑苑小　140
12 虹の向こうには　中央小・鵜沼第二小　153
13 ある転校生のヒミツ　敦賀西小・稲羽西小　168
14 不思議な国　中郷小・蘇原第一小　186
15 本をひらくと　咸新小・鵜沼第三小　203
16 レンのネがい　敦賀北小・中央小　216
17 ティロと魔法の本　敦賀南小・稲羽東小　230
あとがき　敦賀市小学校教育研究会学校図書館部長　岸上　昌清　245
各務原市立八木山小学校長　藤澤　尚樹　247
敦賀市立図書館長　木村　一也　249
各務原市立中央図書館長　関　紀子　250

表紙・挿絵…尾関真奈美

※文中の★はつなぎの箇所です。

虹色の幸せ

敦賀市立黒河小学校

六年　寺谷莉緒

宮崎陽奈子

各務原市立陵南小学校

六年　五島萌

木村遥

田部乃愛

「バイバーイ」
ななは友達と別れてから、道路に何か落ちているものを見つけた。
「なんだろう、これ」
拾い上げてみると、それは四つ葉のクローバーだった。でも緑色ではない。虹色だった。ななはしばらくの間クローバーに見とれていた。でも友達と遊ぶ約束を思い出してクローバーをポケットに入れ、急いで家に帰った。
家に帰ってからも、ななはクローバーを眺めていた。
「不思議なクローバーだなー。本当にきれいな色」
ななは、ふと思い出してあわてて本だなの方へ走って行き、一冊の本を開いた。
「やっぱりあった！」
その本には〝虹色の四つ葉のクローバーを見つけると、四つの願いごとがかなう〟と書いてあった。ななは早速願い事をしてみようと思った。クローバーを持って鏡の前へ行き、

「服がお姫様みたいなドレスに変われ！」
と叫んでみたが、ななの服はいつまでたっても変わらない。
「あれー？　おかしいなー。ニセモノなのかな？」
もう一度同じことをやってみたが、やっぱり何も変わらない。
「どうしてだろう？」
ななは考えこんだ。でも、本をきちんと読んでいないので、ななには分からない。このクローバーが、本当に役立つ願いしか叶えてくれないことを……。
ななが、待ち合わせの公園へ向かって歩いている時、ななの横を走っていた車と、横の道から出てきた自転車がぶつかりそうになった。
「危ない！」
ななは思わず叫んだ。
その時、ななのポケットの中のクローバーがピカリと光った。その瞬間、車と自転車は何事もなかったように走り去っていった。

「えっ……!?」

ななはびっくりして、ポケットの中のクローバーを取り出した。すると、さっきまで四枚とも虹色に輝いていたクローバーの葉が、一枚だけ緑色になっていた。

「うそ……」

ななはぼう然として、その場に立ちつくした。

そのころ、友達のみれいとゆいは公園で待っていた。

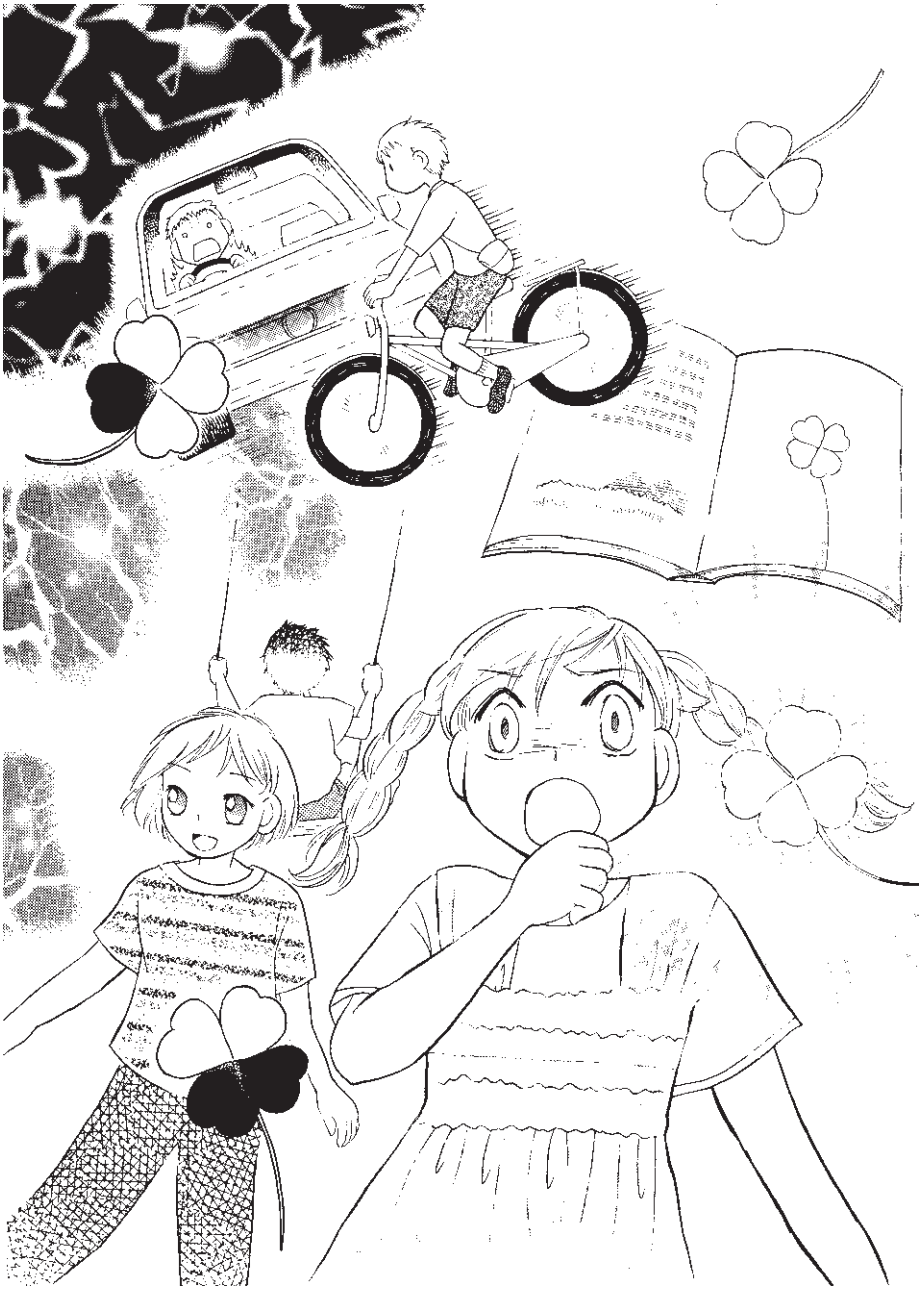
「ゆい、おそいからジャングルジムの上でななを待ってようよ」

と、みれいが言った。

「うん、いいよ」

と、ゆいがジャングルジムへ行こうとした時、ブランコがゆいの頭の上を横切ろうとした。

「危ない！」



ななの叫ぶ声がした。すると、またクローバーが光った。その瞬間ブランコの揺れは止まり、ゆいは何事もなかったかのようにジャングルジムまで歩いて行った。ななは、

「またクローバーが光った？」

と、クローバーを見てみた。すると緑色の葉は二枚になっていた。

「願い事はあと二つしか叶わないのか……」

ななは少ししょんぼりした。でも、笑顔でみれいとゆいのもとまで走って行った。★

「いってきます」

次の日、ななはいつものように学校へ向かった。ななは、みれいとゆいとの待ち合わせ場所で、虹色の四つ葉のクローバーの事を考えていた。なぜドレスにはならなかったのに、自転車や車やブランコを止める事は出来たのか。

「……な、なな！」

考え事をしていたせいで、みれい達に呼ばれている事に気付かなかった。
「どうしたの？　なな」
「……なんでもない……」
三人は学校に着いた。
今日は球技大会だ。外で、男子生徒がボールを投げた。その時、ガッシャーンという音がして窓ガラスが割れ、ガラスの破片が球技大会を見学していた女子にささりそうになった。
「危なーい!!」
とななが叫ぶと、クローバーが光り、窓ガラスの破片は静かに床に落ちた……。
クローバーはまた一枚、緑色に変わってしまった。
あと一つしか願いが叶わなくなってしまった事に心残りがあったが、友達を助ける事ができたのはうれしかった。ななは、クローバーをちょっと見てからポケットにしまい、クローバーのことを考えながら一人で帰った。

ななは、願いが叶ったのは、誰かが事故や危険な目にあった時だけだと気が付いた。その時、いやな予感がしてポケットに手を入れてみると、クローバーが無くなっていた。

とりあえず落ち着いて、来た道を戻りながらクローバーを探してみたが、なかなか見つからない。

ふと、今日はみれい達と遊ぶ約束をしていた事を思い出した。近くの待ち合わせ場所に行ってみたが、誰もいなかった。二人はまだ来ていないのだと思い、ななはまたクローバーを探し始めた。

探しても探しても、クローバーは見つからなかった。

「あった！」

と思うと、

「違った……ただのクローバーか……」

それから三十分後、やっとクローバーを見つけた。クローバーを持って、待

ち合わせ場所へもどったが、みれいとゆいはいなかった。
家に帰ってしばらくすると、お母さんがおどろいた顔で部屋に入って来て、
「ゆいちゃんが事故にあったって……」
と言った。
ななは、急いで病院に向かった。病院の部屋には、意識のないゆいがベッドに横たわっていた。ななは、ゆいの意識がもどるようにと願った。しかし、クローバーは光らなかった。ななは、もう一度願った。
しかし、何も起こらない。
ななは、ゆいのベットのとなりにすわった。
しばらくすると、みれいが部屋に入って来た。みれいは、
「ゆい……」
とつぶやき、それ以上は何もしゃべらなかった。
ななは頭の中が真っ白になっていた。

ゆいの心ぱく数はしだいに減っていき、じょじょに息も弱くなっていく。
その様子に気付いたみれいが、ゆいにけん命に呼びかけた。
だが、ゆいはどんどんすい弱し、とうとう息が止まりかけた。
「ゆい!!」
と叫び、ななは四つ葉のクローバーをにぎりしめた。
すると、クローバーがピカリと輝いた。
光がおさまると、ゆいの息は正常にもどってきた。
ななが安心して床にすわりこむと、ゆいの指が少し動いた。
ななが、
「ゆい？」
と呼ぶと、ゆいはゆっくり目を開けた。
みれいを見ると、口をおさえて泣きそうな顔をしている。ななは急いで先生を呼ぶと、先生がゆいの検査をしにやって来た。

――それから一週間後――

ゆいは退院して、いつも通り学校へ通っている。

ななは、虹色のクローバーを自分のために使えなかった事が残念だったけれど、ゆいや他の人を助ける事が出来たので、これで良かったのだと思った。そして、緑色になってしまったクローバーを、虹色のクローバーについて書いてあった本にそっとはさんでしまった。

世界最強のエスパーをつかまえろ！

敦賀市立粟野小学校

六年　中川瑞希

清水伽奈子

中村紗瑛

各務原市立那加第二小学校

六年　幸田萌花

三澤樹莉亜

「このソフトクリーム、うまし！」
タンスを片手で持つ少女が言った。
「このソフトクリーム、北海道産やでえ」
関西弁の少女が言った。
「お！　あそこにぬいぐるみが、あ……でも、遠い……。うし！　やるか！」
少女はぬいぐるみを自分の方へ動かした。
この少女たちは、あることがきっかけで、普通の人とはちがう能力を持ってしまった。親たちと離れて、今はこの三人で暮らしている。
「なあなあ、千紗斗。もぐ、もぐ」
「何？　明？　まぐ、まぐ」
明が、千紗斗に問いかけた。
「社長はんの約束覚えてはる？」
「え？　おっ、おっ……覚えているよ！　なあに、当たり前のこと聞いている

の！」

「……」

明はしばらくだまって、千紗斗をにらんだ。

「千紗斗。覚えとらんやろ？」

千紗斗はギクッとし、顔が青ざめた。

「顔に『分からん』って書いてあるよ」

奈々がとどめをさした。千紗斗はまたギクッとなり、さらに顔が青くなった。

奈々はため息をついて言った。

『わたしたちがエスパーであるという事をかくし通し、この世界で生きる』って事でしょ」

千紗斗はやっと約束を思い出した。

「少しは奈々をみならったらどうや？」

明のきびしい言葉に千紗斗は「うっ」となった。三人は『ＡＷＮ社　平和な

世の中を築く』という会社に勤めている。その約束だ。

ピンポンパンポン――

『やあやあ諸君。仕事ははかどっているかね？　千紗斗、明、奈々、至急社長室に来てくれたまえ』

「何やろ、任務やろか？」

と明。

「たぶん、そうだと思うよ」

と、めんどくさそうに千紗斗。

「ちっ、またか……」

と、いやそうに奈々。

「じゃ、行きましょか。明、千紗斗」

「おう」

「うん」
千紗斗、明、奈々は、社長室に向かった。
三人が社長室に着いたのはいいのだが……。
「なあ、千紗斗〜」
「何？　明」
明は冷や汗をかいていた。
「うちな、めっちゃいやな予感がするねん」
「なんで？」
「今回の任務、いつもとレベルがちがうと思うねん。奈々はどう思う？」
奈々は、テレポートを使い、任務が書いてある書類を取り出した。
「……明が言ったこと……あながち間違ってないよ……」
めずらしく、奈々の口数が少なかったので、千紗斗もしばらくの間書類を見て、だまりこんでいた。

しばらくして、三人があまりにもおそかったのか、社長が飛び出してきた。
と、思ったが社員だった。
「おっと、君たち遅かったじゃないか。社長がお待ちになっているよ」
この人はみんなから、社長のお気に入りの社員と思われているが、三人は敵対意識を持っている。
「失礼します！」
三人は、声をそろえて言った。
「社長～、任務って何ですか？」
「ていうか、社長はんどこや～」
「お～い！　わしは、ここにおるぞお～」
あっ、居たんだという顔で、なんとなく上を見上げた瞬間、三人は、呆然（ぼうぜん）と立ちつくした。
「今回の任務を簡単に説明しよう」

上空ではヘリコプターの準備ができていたのだ。
「今から大阪に行くんやで」
明が任務の行き先を読み取った。
「その通りだ諸君。実は大阪で最近不思議な事件が起きている」
「不思議な事件？」
奈々がもう知ってるような顔で言った。
「謎の強盗犯が出現しているのだ。そいつは君たちと同じエスパーだが、世界最強なんだ」
「最強なんじゃ、かないっこないでしょ～」
千紗斗が言った。
「だけど……可能性がないわけやないやろ？」
「社長……何のエスパーなんですか？」
奈々は言った。

「それは……大阪で教える！」
「なんでや！　社長はん！」
怒り気味で、明は言った。
なんだかんだあって、千紗斗、明、奈々は、ヘリコプターに乗り、十五分くらいで大阪に着いた。
だが、これから待ち受けていることを、三人は知るよしもなかった。★
大阪に着いた三人は社長をせかして言った。
「なぁなぁ。社長はん、最強のエスパーって何なん」
「それは三つの力を持っている能力者なんだが……」
「その三つの能力って何なんですか？」
奈々の言葉に社長はだまりこんだ。
「諸君おちついて聞いてくれ。三つの能力は、千紗斗と同じ力持ちと、明と同じ先を読みとれる力、あと一つ、これはやっかいだぞ」

「そのやっかいな力って何なんです？」
「謎の強盗犯は、姿を消せる力を持っているのだ!!」
「え～姿を消せてしまうの～!!」
「しかも力持ちじゃ、私の力が通用しないよっ！」
「うちの力と同じの持っとったら、行動を読んでも読みきれんやん！」
「社長、いつ謎の強盗犯が現れるかわかるんですか？」
「いや。しかし場所ならわかる。だが……姿を消して来たら、私たちには見えない」
「たしかに……どうしたら見えるようになるんだろう……」
「お店の周りを、警察にすき間なく並んでもらえば中には入れないんじゃない？つめて並べば、無理やり入ろうとすると体に当たるから、どこに入るかわかるかも？」
「その後にペンキかければ？　体に色が着くからわかるよ」

「なるほど！　それいい！　社長はん。これどうや？」
「ふむ……いいかもしれん……よし、それでいこう」
「は～い！」
三人と社長は、さっそく準備に取りかかった。まず最初に警察署に行き、店を見張るようお願いした。次に赤いペンキを、失敗してもいいように三リットル買った。
あとは、警察官に並んでもらうだけだ。
「あ～、やっぱドキドキするなぁ」
「うん。そうだね。相手は、世界最強だもんね」
そう二人が話していると、警察官が二人はね飛ばされた。
「出た！　やつが出た！　みんな落ち着いて行くで～！」
「だいじょうぶ！　行くよ！」
奈々と千紗斗でペンキをかけてやった。すると見事に命中。強盗犯は全身真っ

赤になった。
「イエーイ！」
と喜びたくなったが、がまんした。
「このペンキは絶対落ちないよ。ふつうのペンキじゃないからね」
と奈々が言っている間に、明と千紗斗で、やつをなわでぐるぐるまきにした。しかも手じょうまで。
そこへ社長がやって来た。
「諸君よくやったな。強くなったな。あとは警察に任せよう」
「はい。警察さん、にがさないで下さいね」
そう言うと、明、千紗斗、奈々、社長はヘリコプターに乗りこみ、ＡＷＮ社へもどった。
「なんかあっけなかったことない？」
「せやな。でもつかまえれたんやで、よかったやん」

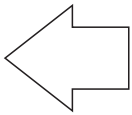
「諸君、本当に強くなったな。入ったばっかの時は、いやだとかこわいとか言ってたのに。また何かあったらたのむよ」

「はい！」

世界最強の謎の強盗犯事件、これにて一件落着。

ぐりの大冒険

敦賀市立粟野小学校
六年　河端優衣



各務原市立那加第三小学校
六年　田原華
山田泰生

太陽がキラキラとかがやく、あるあたたかい日のことでした。

小さな村に、どんぐり丘という小さな丘がありました。丘に登ってくる人は一人もなく、少しさびしい丘でした。でも、その丘の上には、一本のとても大きなどんぐりの木がありました。どんぐり丘という名前も、この木の大きさに、人々がおどろいてつけたと言われています。

そんなどんぐりの木の上で。ポカポカ陽気で、どんぐりたちも気分は上げ上げ。

「今日もいい天気だねー」

「うん。風も気持ちいいよ」

と、大盛り上がり。その大勢のどんぐりたちの中でも、お子様どんぐりで、おてんば娘でぼうけん家な「ぐり」は、いつもいたずらをしています。

こんなぐりには、一つ大きな夢がありました。それは、丘の下の村をぬけたところにある町に行くことです。

ぐりは、いつものように、その町を木の上からながめていました。
「はあ、町ってのはどれだけ楽しいか。本当に一度でいいから、あの町へ行ってみたいなあ」
――と、その時、ピュー。強い風が吹きました。ぐりは、木から落ちました。
「うわあ、なんてラッキーなんだろう。これで町に旅に出られるぞー。風さん、どうもありがとう」
と、空に向かってさけび、ぐりは旅に出る準備を始めました。もう、心臓が飛び出そうなくらいうれしくて、ぐりは落ち着きがない様子。
「よしっ。準備できたぞ。さっそく旅に出るぞ。あっ、仲間たちにあいさつしなきゃ」
と、木に近づき、こう言いました。
「みんな、また帰ってくるから。帰ってきたら、また遊んでね」
すると、どんぐりの仲間たちは、

「ぐりー、行ってらっしゃーい」
「きっと帰ってこいよー。みんな待っとるぞー」
「気をつけて行くんだよ」
と、ぐりを送り出しました。
いい感じで、ぐりは旅のスタートをきりました。
「はあ、はあ、遠いなあ、町は」
と言いながら、すごいスピードで歩いています。さすが、おてんば娘っ。
うれしくて、うれしくてたまらないぐりは、もう足が止まりません。
「到着っ。着いたぞ。あこがれの町に」
ガヤガヤガヤガヤ……。
町は、とてもにぎわっていて、人の声が絶えません。ぐりは、
「これが町かあ……。とてもにぎわっていて、いいところだな」
と、さっそくお店に入りました。そのお店は、本屋さんでした。

ぐりは、お店に入るのは初めてなので感動して、
「これは、本だね。すごい、すごい」
とハイテンション。少し本屋を見て、出てきました。
次にぐりが向かったのは、
「いいかおり〜」
そう、パン屋です。パン屋のおばちゃんは、ぐりのことを見つけ、ちょっとおどろいた様子を見せましたが、すぐに笑って、
「どんぐりちゃん、パンは要るかい？　お腹すいていないかい？」
と、たずねました。ぐりは、お金を持っていません。
「でも、おばちゃん、私、お金、持ってないんです」
おばちゃんは、ちょっと考えるような顔をしましたが、こう言いました。
「そうか。仕方ないね。これから、うちに住まないかい」
ぐりは、町には住むところも食べるものもないので、この一言がとってもう

れしくてたまりませんでした。

「おばちゃん。本当にいいの？　お世話になります。友達になってくれますか」

と、ぐりは聞きました。おばちゃんは、笑顔で、

「もちろんさ。どんぐりちゃんと友達になるよ。お腹すいてるやろ。このパン、食べなさい」

と、パンをぐりにくれました。ぐりは、一口かじりました。そしてパクパク、パクパクと二口、三口パンをかじりました。おいしくて、おいしくて、止まりませんでした。

「おいしい、おいしい」

このパンのおかげで、ぐりとおばちゃんの仲は深まりました。

そのあと、ぐりは、何日か町を探検しました。

しばらくすると、ぐりは、丘が恋しくなってきました。どうしてなんでしょうか。★

それは、今までいっしょにいた仲間達と何日も会っていないからです。色々考えた末、丘へ帰ることにしました。そのことをおばちゃんにうちあけると、

「う〜ん。どんぐりちゃんがいなくなるのはさびしいけど、どんぐりちゃんも、仲間のところに帰りたいんだね」

と、悲しそうに言いました。

「それじゃあ、丘のみんなの分もパンを作ってあげるね」

おばちゃんは、さっそくパンを用意し始めました。

ぐりも丘へ帰る準備を始めます。

そして、楽しかった町に別れを告げました。

ぐりは、おばちゃんのポケットに入れてもらいました。

「何で今まで私にやさしくしてくれたの？」

「それはね、私も昔、どんぐりちゃんのような子だったからだよ」

「どういうこと？」

ぐりは、おばちゃんに不思議そうに聞きました。

「私はすごくおてんば娘でね。色々な所に行ってみたかったからだよ。一回海に行った時にね、迷子になったんだよ。その時、近くにいた人が助けてくれてね、とてもうれしかったんだよ。だから、どんぐりちゃんを見たら、今度は私が助けるべきだと思ったんだよ」

「そうだったんだ、おばちゃん、今まで本当にありがとう」

「こちらこそ、ありがとう。どんぐりちゃんを見ていたら、私もまた、ぼうけんをしてみたくなったよ」

話している間に、丘に着きました。

どんぐり達は、ぐりを見つけると、木の高いところで、ぐりをかんげいしてくれました。

「おかえり！」

「楽しかった？」

「後でお話聞かせてね」
たくさんのかんげいの声の中、一人の子が、「この人だ〜れ」と聞いたので、ぐりはみんなに、
「この人は、町にいた間お世話になった、パン屋のおばちゃんだよ」
と紹介すると、どんぐりのみんなが口々に、
「ありがとう、おばちゃん！」
と言いました。
おばちゃんも、
「どんぐりちゃんがいてくれて、とても楽しかったんだよ。それでね、お礼にこれを……」
と言って、みんなにパンをわたしました。
どんぐりたちは大喜びです。みんなは、おいしい、おいしいと言ってパンを食べ、おばちゃんと仲良くなりました。

おばちゃんは、みんなに見送られながら、町に帰りました。

おばちゃんが帰った後、ぐりはまたいつか、おばちゃんに会いに町に行きたいなあと思いました。

四たんてい事件ファイル

敦賀市立粟野南小学校

六年　石田音和

立木愛香

福岡鈴菜

宮本莉彩

各務原市立八木山小学校

六年　辻角真歩

中村円香

横地心

私たちは修学旅行に行く。行き先は「東京」。
同じ班のメンバーは、あいか、りさ、れな、ＮＥＯの四人。
あいかはかなりの正直者、りさはお調子者、れなは天然女子、ＮＥＯはやさしいスマイル男子だ。

修学旅行の前日、あいかはスケジュール表を破ってしまった。
「どこへ行くんだったっけ？」
あいかは、りさのスマホに電話をかけた。
「もう、仕方ないなぁ。明日、修学旅行で行くところを言うね」
りさはスケジュール表を取り出して読み上げた。
「東京ディズニーランドとシー、東京スカイツリーとゲーセン」
「はぁ？　ゲーセン？」
「以上！」

あっさり電話が切られた。

その頃、れなはＮＥＯに電話をかけていた。

「もしもし」

「ぼく、今おもしろいテレビを見ているんだけど……」

ＮＥＯは、アカン警察を見ているところだった。

れなは、気にしない様子で続けた。

「れーなでーす。東京のゲーセンに犯人が……あっ」

ブチッ。電話が切れた。

「あれー、切れたー」

修学旅行当日。

東京ディズニーランドで、りさはジェットコースターに乗ってさけんだ。ディ

ズニーシーで、あいかはコーヒーカップで目が回って倒れそうになった。東京スカイツリーで、れなはバンジージャンプをした。ＮＥＯもバンジージャンプをしようとしたが、こわくてできなかった。

そして、最後にゲーセン。

突然、れなが、

「人が死んでるよ」

と言った。三人はびっくりして、れなの指さした方を見た。

それは、ＵＦＯキャッチャーの中だった。

死んでいたのは、山下ケロミ、あだ名はケロちゃん。

なぜ分かったかというと、それはＮＥＯの知り合いだったから。

あいかが、

「われら四たんていの出番だ！」

と叫んだ。

四たんていは今まで数々の事件を解決している。
解決が難しいとされた『ワンコ犯人事件』なども見事に解決し、その結果、警察に認められて、今や注目のたんていとなっているのだ。
「まず、落ちているものを確認しよう」
落ち着いた様子であいかが言った。
死体の近くには、血のついた包丁と携帯電話、軍手、車のキーがあった。
「ケロちゃんがＵＦＯキャッチャーの中に入って、携帯しながら、軍手でカバンの中をあさっていたら、包丁と車のキーが出てきて、ケロちゃんは死のうとして自分で刺した……ズバリ、自殺だ！」
りさが推理すると、ＮＥＯはあきれて、
「そんなんあるわけないやん」
と言った。頭のいいあいかは、

「犯人が軍手をはめたのかもしれない……」
とつぶやいた。
ああでもない、こうでもないと四人で推理をしてると、
「なにか、冷たいものが食べたくなった……」
と、ＮＥＯが突然言い出した。
「じゃあ、アイスクリーム買ってくるよ」
と、れなが言った。しっかり者に見えるが、やっぱり天然女子。もうアイスクリームのことしか頭にない。りさも犯人さがしをそっちのけで、アイスクリームに夢中。お調子者は、かなりのあきしょうだ。一番まともなのはあいかだと思ったが、推理をやめてＵＦＯキャッチャーをしている。そして、一番初めにあきそうなＮＥＯだけが真剣に考えていた。これが四たんていのいつものパターンだ。
ＮＥＯが、

「う〜ん、どうしようか」
と悩んでいると、
「ＮＥＯ君、僕が手伝うよ」
と声がした。そこにいたのは、ネズミ。
「君は、だれ？」
ＮＥＯが聞くと、ネズミが答えた。
「僕は、チュー太郎です」
そのチュー太郎は、小さくて弱そうに見えるけれど、話しぶりはとてもかしこそうだ。
その頃、他の三人のところにも動物がやって来た。
あいかには、リスのリーちゃん。りさには、トリのピッピ。れなには、ネコのニャン太。リーちゃんはまん画家、ピッピは歌手、ニャン太はマジシャンらしい。

話を聞いたところ、四匹は動物たんていをしているようで、中でも、一番の切れ者はチュー太郎だという。

行き詰って推理にあきていた三人は、「救世主が現れた」と喜んだ。

その時、ひとりだけ続けて調査をしていたＮＥＯが、駐車場ですごいものを発見した。

「ケロちゃんの車の中に、ウサコちゃんが乗っている！」

ＮＥＯが、みんなに言うと、

「ウサコからいろいろ聞こうよ」

とピッピが言った。★

ところが、りさが言った。

「やっぱり……警察にたのもうよ。めんどくさいし」

「えー!!」

みんながおどろいて、

「何いってるのー」
「やめなよー」
と言っているのに、りさは警察に電話をかけた。
「一一〇!!　もしもし、警察ですか？　人が死んでるんです」
みんなはだまりこんだ。りさの調子のよさにあきれたのだ。
そうこうしているうちに警察が来て、ＵＦＯキャッチャーの中を見るためにカギを開けた。
しかし、中にケロミの死体はなく、手紙だけがあった。
『四たんていのみなさん、こんにちは。私はＫです。その四匹は真相を知っています。さあ、事件を解いてください』
四人はポカーンとしていたが、四匹はニコニコしながら、かくれて何やらやっ

ている。
「どういうことかな……」
口々に言っていると、チュー太郎が、
「みなさん、ぼくの中に入って下さい」
「はあ？　どういうこと……わっ!!」
見上げると、そこには巨大化したチュー太郎。
「なになに？　どういうこと？」
とＮＥＯが言うと、チュー太郎はぐるぐる回転しながら見たこともない世界へみんなを連れて行った。
「着きました！　さあ、事件を解いてみて下さい」
「さっきから意味がわからないんだけど!!」
れなはイライラしながら、チュー太郎に聞いた。
「手紙の送り主にたのまれたんですよ。四たんていがどれだけの事件を解く力

があるのか、調べてほしいってね。では、がんばって下さいね！」
と言うと、チュー太郎は消え、一枚の手紙が落ちて来た。みんなでその手紙を見ると、こう書いてあった。

『包丁についているのは本当の血？　落ちていた物はどうだった？　Ｋはだれのイニシャル？　私はだれ？』
「え……あの血。そうだ、あのにおいは血じゃない……ケチャップだ！」
と、ＮＥＯが言うと、あいかも、
「そうだ、落ちていた包丁は本物じゃないよ。やわらかくて……そう、ねん土だった！」
と言い、りさも、
「Ｋって……あ、ケロちゃんのＫじゃ……」
と言い、最後はみんなで、

「犯人はケロちゃんだー！」
と言うと、ケロちゃんがポンっと出てきた。
「正解！　みんなの力をためしたかったの。でも、さすがね。立派な四たんていだよ」
ケロちゃんが言うと、みんなは照れた。
そのしゅん間、
「りさー、あいかー、れなー、ＮＥＯー」
とさけぶ声が聞こえた。
（え……？　だれが呼んでいるの……？）
目を開けると、クラスのみんながＮＥＯ達を心配していた。
「えっ？　ぼく……？」
「大丈夫？　たおれていたんだよ。ゲーセンの中で」
「ええ……!?」

四人は声を合わせて言った。夢だったのかな……？

でも、今日は修学旅行から帰る日だったので、やっぱり本当のことだったと四人は思った。

今でも、四たんていは色々な活やくをしているのだった。

消えたお菓子の謎

敦賀市立沓見小学校
六年　玉村麗美
菅原有望
小田沙弥夏
久保田菜月

各務原市立尾崎小学校
五年　北村紗蘭
川瀬りのあ
長縄地洸

この物語は、四人の女の子のお話です。
ある夜のことです。ある家で姉妹が大きな声でけんかをしていました。
「うみ、宿題分からなぁい」
と、困っている海のところに、姉の美海がやって来て、
「どうしたの、海」
と、話しかけました。
「宿題、分からないの？」
「うん」
「そんなのも分かんないの～」
と、美海が言ったので海は怒ってしまいました。そして、
「うるさいなー」
と、小さな声でつぶやいたらけんかが始まり、美海は怒って部屋を出て行ってしまいました。

そこへ犬の散歩をしていたれいさとゆうみが、遊びに寄りました。
「どうしたの？」
れいさが心配して声をかけました。
「私が宿題をやっていたら、お姉ちゃんにそんなのも分からないの～と言われてむかついているの」
と、海が答えると、
「美海ちゃんは、中学二年生だから分かるに決まっているでしょ」
と、なぐさめてくれました。
「うん、そうだよねぇ」
そこへゆうみがやさしく問いかけました。
「だいじょうぶ？」
「うん、まあね」
と、海は言いました。けれど、心の中では、まだお姉ちゃんは怒っているんだ

ろうなと思っていました。
美海がまた部屋にやって来ました。やっぱり怒っている表情で、美海が言いました。
「海、昨日、わたしのお菓子食べたでしょ！」
「……」
「絶対食べたでしょ。許さないから」
ところが、海はお菓子を食べていません。ただ、返す言葉が思いつかず、だまってしまったのです。
そこで海は、れいさとゆうみに相談することにしました。
「あのね、私がお姉ちゃんのお菓子を食べたって言うの。でも、私は食べてないの。どうしたらいいかなー？」
れいさが言いました。
「だれが食べたんだろう」

「つきとめてみようよ！」
「うん。そうしよう！」
こうして、れいさとゆうみは姉妹を仲直りさせるために、探偵団をつくることにしました。
〜次の日〜
れいさとゆうみは海の家に行きました。ゆうみは、まず美海に事情を聞いてみました。
「何時頃におやつはなくなっていたの？」
「三時半頃だったかな」
と、美海が答えました。
「私たちがいないときに家にいるのはお母さんだけだよ」
「えっ、まさか……」
四人は顔を見合わせました。

KASHI

「お母さんが食べたのかも……」
四人はお母さんに聞いてみることにしました。
「お母さん、私のお菓子、食べたでしょ？」
と美海が言うと、
「えっ、お母さん食べてないわよ」
「え〜〜〜」
四人はいっせいに言いました。
「そういえば、お父さんが三時くらいに帰ってきたんだけど……」
と、お母さんが言いました。★
美海と海の姉妹は、お父さんが会社から帰るのを待ちました。
「きっとパパが食べたんだよ」
海はそう言いました。美海もそう思っていました。と、その時、お父さんの声がしました。

「ただいまーっ」
「パパだ！」
げんかんに走って行った美海が大声で言いました。
「パパ！　わたしのお菓子、食べたでしょ！　季節限定のお菓子だったのにー」
しかし、パパはキョトンとしています。
「そんなお菓子のことは知らないよ」
「えっ、じゃあ、だれが食べたんだろう」
美海たちは不思議に思いました。家族は、パパとママと美海と海の四人しかいません。
次の日も、姉妹はれいさとゆうみを呼んで、四人でさらに調べてみることにしました。
「犯人は、必ず事件現場にもどってくる」
すいり小説が大好きなゆうみは、すっかり探偵気取りです。美海たちは、ゆ

うみの言う通りに、同じ部屋の同じテーブルの上にもう一度お菓子を置いてみました。そして、自分たちはふとんの中にかくれ、しばらく様子を見ることにしました。

すると……。

どこからか、小さな小さな人たちがぞろぞろと大きな布を持って歩いて来るのが見えました。それも二十人くらい！　みんな十センチメートルほどの背の高さです。初めは大きな昆虫かと思いましたが、よく見るとちゃんと人の形をしています。四人は目をうたがいました。

「小人だ……」

小人たちは、持ってきた布にお菓子を乗せ、その布のふちを大勢で持ち上げて、せっせと運んでいきます。

「どこへ行くんだろう」

小人たちの行き先は、屋根裏部屋でした。

「ねえ、屋根裏へ入って行ったよ」

四人はこっそりと息をひそめて、その屋根裏をのぞいてみました。すると、海が幼いころに遊んでいたドールハウスが目にとまりました。

「あのドールハウスの中に、小人がいるかもしれないよ」

小人に聞こえないように小さな声で、れいさが言いました。

「見てみよう」

そっと近づき、四人が中をのぞきこむと、大勢の小人たちがいて、そこでくらしてるようでした。三十人くらいはいるでしょうか。おもちゃのまな板とほうちょうで食事を作っている小人、テレビを見ている小人、ゆったりとお茶を飲んでいる小人、洗たくをしている小人、けんかをしている小人など……。

小人の中にも「大人」と「子ども」がいるようで、十センチメートルよりもずっと小さい小人もいます。赤ちゃんの小人は小さなミルクを飲んでいます。

その中から、リーダーらしき小人が海たちのほうへ近づき、四人を見上げて

言いました。

「みなさんの大切な食べ物を勝手に持って行ってしまって、ごめんなさい。私たちは、食べる物があまりなくて困っています。食べ物を少し分けてもらえませんか」

それを聞いた四人は、小人たちをかわいそうに思いました。

「少し分けてあげようか」

美海と海は、お母さんにないしょで、台所の冷ぞう庫から食べ物や飲み物を取り出し、屋根裏部屋へ運びました。ごはん、ハム、キャベツ、レタス、のり、お茶などが、小人たちの前にずらりと並べられました。初めて見る食べ物におどろいた小人たちは、お礼を言ってみんなで分け合い、おいしそうに食べました。

次の日、四人は小人たちのために遊び場を作ってあげることにしました。小さなブランコ、小さなすべり台、鉄ぼう……手作りの遊具を、小人たちが出か

けている間に、ドールハウスのすぐ横にそっと置いておくと、帰ってきた小人たちは大喜びしました！

月日がたち、美海たちと小人たちはすっかり仲良くなりました。

けれど、この屋根裏部屋の小人たちのことを知っているのは、美海、海、れいさ、ゆうみの四人だけです。大人たちはだれも知らない、四人だけの秘密。

もしかしたら、あなたの家の屋根裏部屋にも、かわいらしい小人たちが住んでいるかもしれません。特に、テーブルの上のお菓子が知らないうちになくなっていたなら、それは小人たちのしわざかもしれませんよ。

ぼくらは　秘密探偵団

敦賀市立松原小学校

六年

吉田　真奈美

須賀原　沙弥加

福本　悠夏

一ツ橋　遥

各務原市立各務小学校

六年

吉村　月歌

五年

大谷　美空

堀　綾華

主人公　女　五月（さつき）明香（めいか）…元気いっぱい…明ちゃん
竹田（たけだ）千浩（ちひろ）…頭のいい子で事件いつも解決…竹ちー
男　石野（いしの）優希（ゆうき）…とても事件好きの男の子…優君
黒子（くろこ）五木（いつき）…静かな、おとなしい子…黒子っち

ある日、秘密探偵団の所に変な手紙が来た。それは、挑戦状。
『五月明香をゆうかいした。「学校の四の三七二は何だ？」この暗号を解け。
そしたら、次の問題を出す』
「どうしよう」
と、竹ちーが言った。三人は考えた。
「とりあえず、この暗号を解くしかないんじゃないか」
と、優君。
「そうだよな。考えよう」

黒子っちが答えた。

六年Ａ組で、一人一人が数字のつく関係を調べてさぐってみた。でも、分からない。静かな学校の中に、風鈴の音が響いた時、竹ちーが閃いた。

「そうだ。学校の金庫だ！　次の暗号はそこに隠れているんだ」

三人は、急いで校長室の金庫を開けた。そしたら、次の暗号が出てきた。

『優勝』……だけだった。三人はまた考えた。

そして、優君が言った。

「とりあえず、一つ分かる事がある。それは、この学校を知っている人にちがいないということだ」

無口の黒子っちが言った。

「『優勝』といえば、スポーツだから、体育館横の掲示室じゃないかな？」

その言葉に三人が納得して見てみたが、暗号らしきものは何も書かれていなかった。

それでも探し続けていると、ゆうかいされた明ちゃんが見つかった。みんなは、ほっと息をついて安心して笑顔になった。

明ちゃんに話を聞くと、

「私が廊下を歩いていたら、後ろから誰かが急に口を塞いだの。そして私を隠した。相手は顔を隠していて見えなかったけど、身長は百六十センチ位の男の子だったわ」

と、くわしく説明してくれた。

その日は、それで終わりじゃなかった。次は、学校の何かが盗まれて、また手紙が届いた。

「これって、明ちゃんをゆうかいした人からだよな？」

と、優君が言った。

「たぶん……」

と、明ちゃんが言った。

「明ちゃんに続けて、学校の物なんて、なぜ私たちに関係した物が盗まれるんだろう」
と、竹ちー。
「これをしている人は、おれたちをよく思っていない人だろう。しかし、みんなで力を合わせて、この事件を解決していこう！」
優君が言うと、みんなはいっしょに「うん」とうなずいた。
「かといって、おれたちをよく思っていない人とか、いたかな？」
「うんとねぇ。たぶんだけど、去年転校したクラスメイトは、私たちのこと、よく思っていないかもね」
「あ、確かに。あの子なら、学校のことを知っているし、おれたちのこともよく思っていないかもな」
と、竹ちーと黒子っちが言った。
「よし、なら去年転校したクラスメイトだと考えると、解決できないかな」★

去年の秋頃、突然転校していった男の子は、桜井俊君。家の事情でとなりの小学校に移った子だ。俊君は頭が良くスポーツもできるが、ちょっと変わった子だった。

次の日、四人は事情を聞くために、俊君の家に向かった。三十分ほど歩くと、ようやく家が見えてきた。家のチャイムを押すと、俊君が出てきた。俊君は、五年生の時よりさらに背がぐーんと伸び、真っ黒に日焼けしていた。

「今日は、俊君に話があって来たんだよ」

と、竹ちーが切り出した。

「君たちが来ると思っていたよ」

思わぬ返事に、四人はびっくりした。

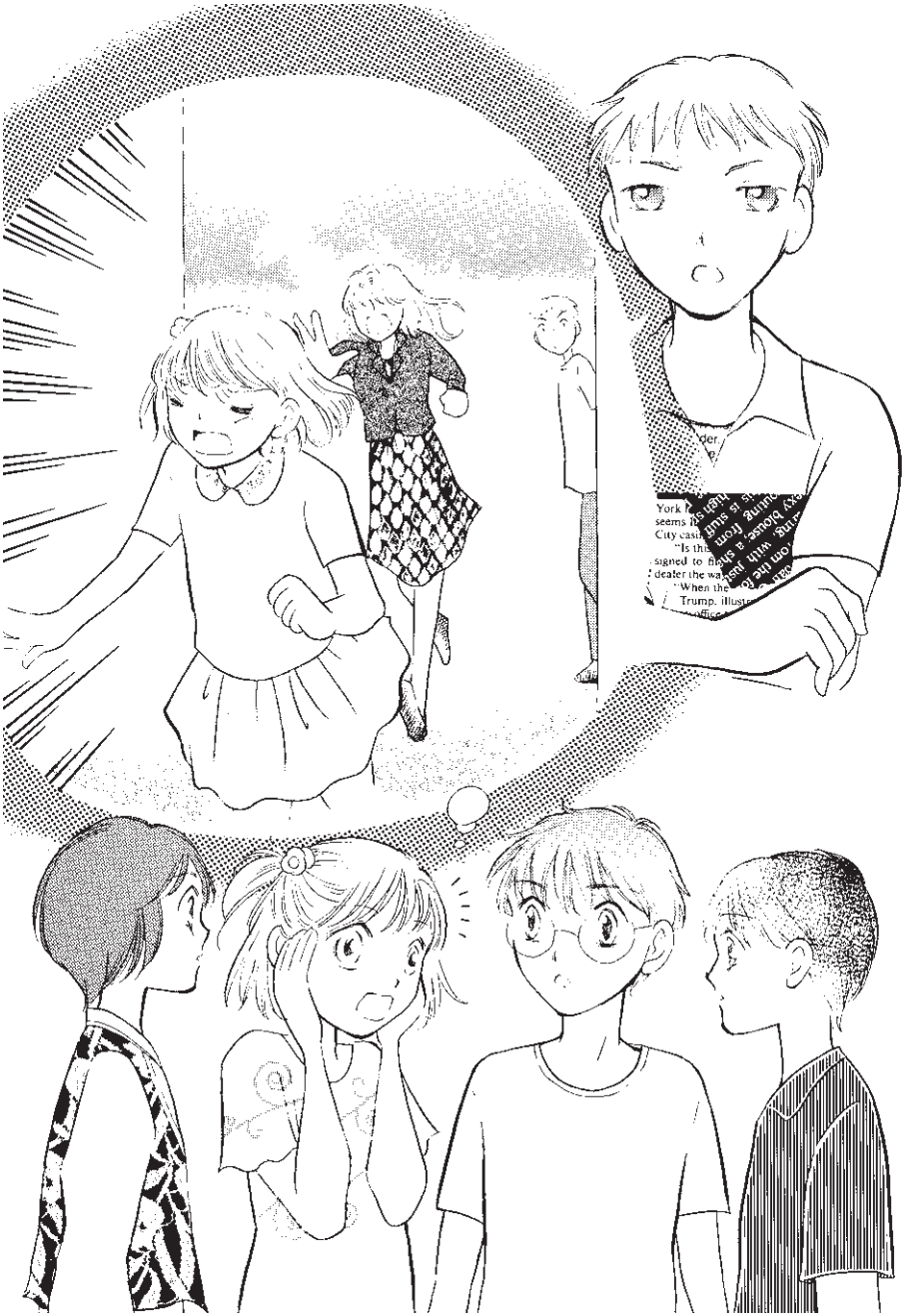
「ぼくが作った暗号が解けたんだね」

「やっぱり、明ちゃんを閉じこめたのは、俊君だったんだね」

と、竹ちーがつめよった。

「そうだよ。でもそれにはわけがあるんだ。助けるつもりで、ああするしかなかったんだよ」
「あっ」
と、明ちゃんはさけんだ。
「わたし、あの時、ユリ子先生に追いかけられていたんだあ！」
「え？」
と、みんなが明ちゃんの顔をのぞきこんだ。
「でも……、なぜ追いかけられていたのか、思い出せないの……」
「ぼくはちょうど学校に遊びに行ってて、必死で逃げている五月さんを見かけたんだ。何が何だか分からなかったけれど、とっさに助けなくちゃと思って、五月さんを体育館横の掲示室に閉じこめたんだ」
「そうだったんだぁ……」
黒子っちが言った。

「じゃあ、なんでユリ子先生は明ちゃんを追いかけたんだろう」
「この不可解な事件を五人で解明しよう！」
と、優くんが元気よく言った。
俊君のうたがいが晴れたところで、五人は事件が起きた学校に再び戻った。休みの日の学校は、物音一つなく、セミの鳴き声しか聞こえなかった。五人はまず、六年Ａ組に向かった。
「確か、忘れ物を取りに行ったんだよね。その時のこと、思い出せる？」
と、竹ちーが聞いた。
そのとき、下の階で大きな音が聞こえた。
「あっ、思い出した！　私、忘れ物を取りに教室に戻ったら、下の階から大きなドアの音がしたんだ。様子を見に行ったら、ドアの前に立っていたユリ子先生に突然追いかけられたの」
と、明ちゃんはつらそうに思い出した。



「さっき、下から音がしたよね。この下って確か校長室だよね」
と、竹ちーがみんなに不安そうに聞いた。
「きっと、そうだよ。校長室に行ってみようよ」
みんなの意見がまとまった。
校長室に着くと、少しドアが開いていた。五人は、そこから中をそっとのぞきこむと、ユリ子先生が手に何かを大事そうに持っていた。そして、
「前回は、うまく盗めなかったけど、今回は大丈夫そうね」
と言いながら、こちらに向かってきた。
ドアを開けて五人の顔を見つけると、ユリ子先生はあわてて逃げ出したので、五人は走って追いかけた。
やっとのことで五人は、ユリ子先生を取り押さえた。
「ユリ子先生！　先生が手に持っている物は何ですか？」
と、不思議そうに黒子っちが聞いた。

「宝石。これは、本当は、私の物なの」
と、落ち着いて答えた。
「この宝石はとてもめずらしく、校長先生が貸してくれと言ったから、一週間の約束で貸したの。なのに、返してくれなかったの。だから、ただ取り戻そうとしただけなの。だれにも言わないで」
と、ユリ子先生が、声を落として言ったので、五人はつかまえていた手をゆるめた。すると、すかさずユリ子先生はとび起きて、
「やっと、宝石が手にはいったわ。さっきの話はうそ。まんまとひっかかったわね」
と、おかしくてたまらないというように笑いながら言った。
そのしゅん間、けむりがあたりを包んだかと思ったら、ユリ子先生の姿は消えていた。みんなはしばらくの間、あ然としてしまった。
やがて優君が、

「また、ユリ子先生を探して、今度こそつかまえようぜ！」
と、この事件にいどむように言った。
明ちゃん、優君、竹ちー、黒子っち、俊君の五人は、終わらない事件を解決するため、今日もがんばっている。

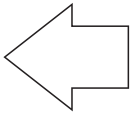
アユのクラウドワールドへの挑戦

敦賀市立常宮小学校

五年

塩谷祐海

河端沙歩



各務原市立鵜沼第一小学校

五年

大串実希

真田遥佳

佐久間玲

梅田唯花

「ちぇっ、今日も雨かよ。また外で遊べねぇのかよ」
と、アユのクラスの男子はすねている。ここ二週間ほど梅雨でもないのに、雨が降り続き、クラスの子はみんな少し顔がどんよりしている。でも、アユは雨の日がダントツで好きなのだ。理由は、お気に入りのかさをさして登下校できるからである。
その日の帰り道、アユはかさをさして一人で歩いていた。すると、とても強い風が吹いた。
「きゃあー！　とばされるぅぅぅ！」
と言いながら、アユはあっけなく飛ばされてしまった。飛ばされながら、ちょっと目を開けてみると、今まで見たこともない景色だった。アユは少しだけうきうきしたが、やっぱりこわくて目をつぶった。
たった数分の間にすごく高いところまで飛ばされていた。
（なに？　この地面、ふっかふかだ……。ここ、どこなんだろう）

すると、
「ようこそ、雲の上の世界、クラウドワールドへ！」
だれかが、うきうきした声で言った。
「うわぁぁぁぁ！　びっくりした！」
アユは、こしがぬけそうになるほどおどろいた。目の前には、顔がふわふわで、服を着た人が立っていた。
「だれ？　あなた……」
アユはおそるおそる聞いてみた。
「ぼくは、クラウドワールドの案内人のモックだヨ！」
と、にこにこしながら答えた。アユは、不思議そうにモックを見つめていた。
「あなたの顔は、何でできているの？」
と聞いてみると、モックは当たり前のように答えた。
「雲だよ」

アユは、あまり信じてなさそうに、へぇ、と言った。そして、
「ここはどこなの？」
と聞くと、モックはよくぞ聞いてくれたというように答えた。
「ここは、雲の上の世界・クラウドワールド。ここにあるものは全部、雲でできているんだよ。あっ、それで、女王様が君に話があると言ってたんだ。今すぐお城に行くよ！」
モックは手をたたいて、タクシーを出した。
なにがなんだかわからないまま、アユはお城に連れて行かれた。
「女王様のおなーりー」
きれいな顔で、ふわふわのドレスを着た女の人がいすにすわった。
（上品な人だなぁ、あの人が女王様？）
「あなたがアユですか」
と、その女の人が美しい声で言った。

「はい、そうです」

アユはどきどきしながら答えた。

「地上では今、雨が降り続いていますね。それはこの世界が原因なのです。雨雲をどかす仕事が行われているのですが、どかすために必要な道具が壊れてしまったのです。道具を直すにはあなたの力が必要です。手伝ってくれますね、アユ」

アユはとっても迷った。学校や家族のことが頭をよぎり、一時間くらい考えてから決心した。

「お手伝い……します！」

その後一週間ほど家には帰れない、と言われたが、アユは、引き受けた。

しかしその日は、家族に事情を伝えるため、いったん家に帰してもらった。

そして家族に、今日あったことを話した。

「アユ、熱でもあるの？」

と、父も母も姉も妹もみんな、アユを信じなかった。アユは（そうだろうな）と思っていた。

アユは次の日からクラウドワールドで手伝うことになった。

「おはよう！　アユちゃん」

モックが笑顔であいさつした。

「今日からよろしくね」

とアユが言うと、

「それがね……道具、直っちゃったの！」

とモックが言った。

「はい？　えーーーっ！　なっ、直ったのぉ！」

すっごくおどろいて言った。

「じゃ、じゃあ……わたし、もしかして必要無し？」

アユが言った。モックは、

「ＹＥＳ！　ごめんね。せっかく来てくれたのにね。女王様も『せっかく来てくれたのにごめんね』って言ってたよ」
と言った。アユは、
「じゃ、じゃあ、帰るね……」
と言って、地上に帰ろうとした時、モックのけいたい電話が鳴った。
「もしもし、モックさんですか？　大変です！　また道具がこわれてしまいました！　しかも、雨雲が大量発生して、地上ではいつ嵐が起きてもおかしくない状態ですっ」
アユは、
（うそでしょ……家族はどうなるの？　クラスのみんなはどうなるの……）★
「うわあ！」
電話がプツリと切れた。モックはびっくりして、電話をかけ直したがつながらなかった。すると、髪の長い人が上からまい降りてきた。その人は真っ黒の

ワンピースを着て、ブーツをはいていた。そして、
「どうしたの？」
と聞いてきた。モックは、
「雨雲をどかす道具がこわれたんだ」
と答えた。すると、その女の人は写メを見せた。
「このことかな」
何とそこには、どかすための道具が写ってた。
「その道具、どこにあったの？」
アユが聞くと、
「教えないよ」
と言い、
「私の名前はクレオ。この国の魔女よ」
と言った。モックははっとして言った。

「この国の悪い魔女って、おまえだったんだな」
クレオはくすっと笑った。アユが、
「あなたの目的は何？　地上で嵐が起こって、死者が出るかも知れないのに」
と聞くと、クレオはこう答えた。
「私の目的は、地上とクラウドワールドをすべて自分のものにすることだ。今度は絶対に失敗しないからな」
「待ってよ。雨雲をどかす道具を返して」
アユの言葉に耳を貸さず、クレオはほうきに乗って消えてしまった。
アユとモックは、女王様の所に行き、今までのことを話した。すると、女王様は言った。
「あなたに魔法の力をさずけましょう」
「私に、魔法の力が使えるかしら」
「ぼくがいっしょだから大じょうぶだよ」

とモックはアユに言った。二人はクレオをさがしに行った。
そこでクレオを見つけたアユは、
「魔法対決で私たちが勝ったら、雨雲をどかす道具を返してよ」
「いいわよ。私に勝てるかしら」
とクレオは言った。するとアユは、
「ええ、絶対勝てるわ。だってモックがいるんだもの。だから、負けないわ」
「ウフフ、それはどうかしら」
と言って、ぱっと消えてしまった。アユは心配になったが、モックは、
「大じょうぶだよ。ぼくがついてるよ。道具のかくし場所が予想できるんだ。写真を見た時の背景に見覚えがあるから。さあ、急いで行こう」
そのころ、クレオは、こんなことを言っていた。
「あっはっは。雨雲をどかす道具のかくし場所なんて、だれにも分からないからな」

アユとモックは、女王様のお城に行った。
「ねえ、ここは女王様のお城だよね？」
「うん、そうだよ。まちがいないよ」
アユとモックは、お城へ入った。
「おい、女王様。いや、女王！　おまえはクレオと手を組んで、地上を乗っ取ろうとしてるんだろ」
「何を言っているの。私がそんなことすると思いますか」
「だって、ここに雨雲をどかす道具があるんだろ！　クレオの写真にここの背景が写っているんだ」
言い終わると、女王様の様子が変わった。いきなりだまり、シーンとした。
そして、
「あっはっは、よくわかったね。そうさ、私はクレオの姉のクレンさ。最初から地上とクラウドワールドを乗っ取るつもりだったのに、失敗ばかり。でも今

回は失敗しないよ。道具は私たちの手にある。今回は私たちの勝ちさ」
すると、アユがさけんだ。
「そんなことはない！　クレオと魔法で対決するんだ。モックと力を合わせて、あんたたちに勝つんだ。勝負はこれからよ」
「何ということを。よし、勝負してやる」
クレンは言った。そして、アユも言い返した。
「でもあんたが負けたら、道具を返してよ」
「いいだろ。だが、私は負けない」
すると、クレンの前にかべが立ちはだかった。
「これを魔法でこわしたら道具を返そう。今から、日の入りまでだ。分かったな」
クレンとアユ・モックの対決が始まった。
いつの間にかクレオも来ていて、クレオもクレンものん気そうに見ていた。

「よし、モック行くよ」
「うん」
次第に日の入りが近づいた。かべは少しずつこわれたが、まだまだだ。ようやくアユにさずかった魔法が効き始めた。そして、あと少しで日の入り。二人は最後の力をふりしぼった。
「最後の力、くらえええ！」
グッ、グワ、グワーン！
「やったあ、かべがこわれた」
「くそっ、こんなやつらに。でも、しかたがない。約束は約束だ。道具を返してやる」
クレンとクレオは道具を置くと、ぱっと消えてしまった。
「さあ、雨をやませよう」
地上の雨はやみ、クラウドワールドも無事だった。

アユとモックは別れを告げた。
「じゃあね、モック。絶対わすれないよ」
「アユ、わざわざ地上から来てくれてありがとう。さようなら、アユ」
「さようなら」
目を開けると、アユは家にいた。家族はアユの話を信じなかったけれど、アユはそれでいいと思った。
夜になった。アユはクラウドワールドのことを考えながらねむった。
（モックは、今ごろどうしているだろうか……）

Gift

敦賀市立松原小学校

六年

柿花実希

冨尾舞

松本紗季

白井真由香

各務原市立川島小学校

六年

苅谷将汰

久瀬東

尾関帆乃佳

ある家に、一人の女の子がいた。名前は、レミ。四人家族で、レミは一番年下の九才。レミには、友達がいない。レミのたった一つの願いは、一人でもいいから友達がほしい。それだけだった。

（こんな私に友達なんか、できっこない）

ずっとレミは、そう思っていた。

（あー、流れ星でも現われないかなあ。でも、そんな奇跡みたいなこと起こるはずない）

こう思っていた時、キラキラ……。

「あっ、流れ星だ！」

レミは、びっくりしすぎて、願いごとをすることを忘れてしまった。

「あ〜ぁ」

レミは、とても残念だった。もしかしたら流れ星に願いを言ったら、友達が

できたかもしれない。せっかくのチャンスをのがしてしまった。
また次のチャンスがやってくるのを待っているだけだった。
次の日、レミは学校に行った。
レミは、休み時間が大嫌いだった。なぜなら、レミは一人だから。友達がいないレミは休み時間はみんなと遊ばず、ずっと読書をしていた。やっと三時になって下校。
（ヤッター）
レミは毎日、心の中でそう思っていた。
ある日、下校と中の草むらにダンボールが捨てられていた。その中から、
「ワンワン」
と鳴き声がした。レミがおそるおそるダンボールを開けてみると、中にいたのは、やせて汚れた犬だった。その犬は、レミのことをじっと見つめていた。
レミは思った。

（私と同じだ）

「よし。このワンちゃん、お母さんにないしょで連れて帰ろう」

レミは、そう決めた。急いでエサを買ってきて、食べさせた。すると、この犬はおなかがすいていたのか、パクパク食べた。

その夜。

「あっ、犬の名前どうしよう……んー」

レミは三十分位悩み続けた。

「あっ、そうだ！　この子、流れ星からのおくりものかもしれない」

流れ星を見た次の日に出会ったから、星という意味で、犬の名前を「スター」にした。

「スター、スター、スター、おいで！」

でもスターは、なかなか自分の名前を覚えてくれない。ただ、手をたたいた

ら来るだけだった。そのあとも、何回も名前を呼び続けた。四時間たって、やっとスターは自分の名前を覚えてくれた。これほどうれしかったことは、今までに一度もない。レミは、大はしゃぎした。

次の日、学校が休みだったので、スターを連れてどこかへ行きたいと、レミは思った。

「んー、あっ公園。スターを連れて公園に散歩しに行こう」

スターは初めての散歩だったので、しっぽを振り、とってもうれしそうにしていた。まるでスターが名前を覚えてくれた時のレミのように。

「さあ、行こう、スター」

スターは、飛びはねながら走った。レミも、友達ができてとてもうれしかった。

（犬だって、人間と同じだ。スターと私は友達だ。でも……やっぱりしゃべれて相談できる友達がいいな……）

レミは、そう心の中で思っていた。考え事をしているうちに公園に着いた。その公園は広々としていて、犬の散歩にぴったりだった。そしていろいろな犬もいて、スターはウキウキしている。その時、

「お〜い、レミちゃん」

後ろから声がした。こんなふうに家族以外の人から自分の名前を呼ばれたことがない。だって、だって友達いないもん。レミは振り向いた。

レミを呼んでいたのは、クラスメイトのレイナちゃんだった。

レミは、（なんで私に話しかけてくれたんだろう）と不思議でならなかった。

レミは言った。

「あっ、こんにちは」

レイナも

「こんにちは」

レミがクラスメイトに話しかけたのは、これが初めてだった。★

「かわいい犬。何ていう名前？」
「…えっ？　スターだよ。流れ星を見た次の日に拾ったんだ」
「流れ星の犬かあ。ロマンチック。なんだか良いことありそうだね」
二人はとりあえずベンチに腰をおろした。
「……」
二人の間にしばらく沈黙が続く。レミはこの状況にいたたまれなくなり、もう家に帰ろうと思った、その時だった。
「あっ、レミちゃん。ちょっと……、聞いてほしいことがあるの」
「えっ？　私？で……いいの？　今まで話をしたこと、なかったのに」
「あたし、前からずっと、レミちゃんと話をしてみたいと思っていたの。ほら、いつもレミちゃんって本読んでるじゃん。ちょっと近づきにくかったんだよね」
（……もしかして私、友達ができなかったのは、自分で近づきにくい雰囲気を作っていたからなのかなあ）

「あっ、でもあたし、うらやましかったんだよ。だってあたし、運動はまあまあだけど、勉強が苦手でしょ。レミちゃんは勉強できるもんね、すっごく！あたし、兄弟の中で一番勉強できないから、今のままだと学習塾に入れられちゃうの！　助けてぇ」

レミはびっくりした。まさか自分が、レイナの『憧れ』の存在だったなんて。レミはうれしくて思わず言ってしまった。

「じゃあ、私が勉強教えてあげようか」

「ほ、本当？　次のテストが百点じゃないと、もう遊ぶ時間が無くなっちゃう。……塾入れられるの確実だから」

スターが、レイナを見上げて、心配そうにキューンと鳴いた。

（レミちゃん、今がチャンスだよ。助けてあげれば？）

その声はレミにだけ聞こえるみたいだ。

「じゃあ、レイナちゃん。放課後、毎日私の家に来て。勉強、一緒にしよう」

「うん！　明日からよろしく！　あたしがんばるから」
そう言ってガッツポーズをするレイナは、すごくかわいかった。二人は、にっこり笑って別れた。レミはスターを抱き上げて言った。
「ねえ、スター。私、あなたがいたからレイナちゃんと話ができた。ありがとうね」
「キャン、キャン」
スターもうれしそうだ。
（……もしかしたら、スターは不思議な力をもっているのかも知れない――）

今日はいよいよテストが返ってくる日。レミは朝からどきどきしている。
（レイナちゃん、大丈夫かなあ。せっかくお友達になれたのに、塾に行くことになったらまた一人ぼっちになっちゃう）
あの日から二週間、二人は毎日放課後にレミの家で勉強をしてきた。レミの

お母さんは「レミのお友達が、初めて家に遊びに来てくれた」と大喜びで、食べきれないくらいのおやつでレイナをもてなした。始めは何となくぎくしゃくしていて、うまく話せなかった二人も、三日目にはキャアキャア言いながらいろんな話ができるようになった。

放課後、レイナがそっと近づいてきた。

「レミちゃん、ごめん。……ダメだった。八十八点だった……。塾、決定だぁ」

「そっか……」

とぼとぼと歩く二人の影法師が、道に長くのびていた。

その晩レミは、スターと夜空を見上げた。

「ねえ、スター。私、この二週間、本当に楽しかったよ。レイナちゃんと一緒に、いっぱい勉強もしたけどいっぱいお話もした。私の話を楽しそうに聞いてくれたお友達は、レイナちゃんが初めて。塾へ行くことになると、今までのようには会えなくなるけれど、これからもずっと仲よくしたいって思っているん

だ」

（よかったね、レミちゃん。もう一人じゃないね。ぼく、安心したよ）

あの声が、また聞こえてきた。

「レミちゃーん！」

弾んだ声にふり返ると、レイナがすごい勢いで走ってきた。

「レミちゃん聞いて！　塾、行かなくても良くなったの！　うれしい！」

「どういうこと？」

「昨日、テストをパパに見せたらすごくおこっちゃって、絶対塾へ入れると言うのね。でもママが、今までの点数と比べてすごく良くなったんだから、その頑張りを認めても良いんじゃないかって言ってくれて……」

「そうなの！　良かったね。私もうれしい」

「それにママったらパパに、レイナには、いいお友達もできたんだし、お友達

と過ごす時間は、勉強より大切なのよ、って言ってくれたの」

レミは本当にうれしかった。ずっとほしいと願っていた『お友達』が私にできたのだ。世界中の人に大きな声で伝えたいくらいだ。

家に帰って早速スターに話そうと思ったのに、肝心のスターがいない。庭を探しても、近くの公園を探しても、どこにもいない。

次の日、レイナと一緒にスターを捜した。スターを見つけた公園や、ちょっと遠い川の堤防まで行った。それでも、見つからない。

何日も何日も、二人は思いつく所すべてを捜した。どんなに捜しても、スターは見つからない。煙のように消えてしまったみたいだった。

心配で眠れない日が続いたレミは、ある晩疲れからか、うとうとと眠ってしまった。

（レミちゃん、レミちゃん）

例の声がする。

（レミちゃん、ぼくだよ。スターだよ。レミちゃん、ぼくを一生懸命捜してくれてありがとう。でも、もうぼくは見つからないよ）

「スター！」と呼ぼうとしても、声が出ない。

（レミちゃん、聞いて。ぼく、実は星の神様の使いなんだ。レミちゃんはすごくお友達をほしがってたね。その願いを聞いて、神様がぼくをお友達にとつかわしたんだ。レミちゃんが見た流れ星はぼくさ。ぼくを大切にしてくれてありがとう。ぼく、レミちゃんとずっと一緒にいたかった。でも、もうぼくの役目は終わったよ。ありがとう、レミちゃん。ぼくは君のこと忘れないよ。さようなら）

「スター！」

大声でさけんでレミは飛び起きた。涙がほほを伝っている。

（スター。私の願いをかなえに来てくれていたんだね。私はスターと仲良くな

れてうれしかったんだ。それにスターのおかげでレイナちゃんとお友達になれた。だから学校も楽しくなったんだ。これからもレイナちゃんと仲よくしていくよ。いつもスターのこと思い続けていくよ。ありがとう……スター）

（ありがとう）

窓の外の星が、キラッと瞬いた。

恐竜島のなぞ

敦賀市立西浦小学校

六年　形部優輔

五年　寺元胡乃実

各務原市立蘇原第二小学校

六年　宮田ちひろ

永山萌

武田紗那恵

教室の窓から外をながめると、はるか沖に島が一つ見えます。名前は付いていませんが、その形からみんなは『恐竜島』と呼んでいます。すごくきれいな島ですが、出入りが禁止されていて、ここ十数年、島に渡った人はだれもいません。どうして恐竜島に渡ってはいけないのだと思いますか？

それは、島にある『恐竜灯台』にまつわる恐ろしい言い伝えがあるからです。実はその灯台には誰も見たことのない恐ろしい生き物がいるというのです。

ここは水島小学校。目の前にきれいな海が広がる自然豊かな学校です。

六年一組の仲良し五人組（リーダーシップを取っているイケメンの勝、ちょっとおばかな弘、いたずら大好き健、とても頭の切れる美咲、いつも冷静な笑美（えみ））は、毎日、元気いっぱいに学校へ通っています。

夏休みも近いある日、五人は夏休みの宿題の本を探しに、そろって図書室にいました。そのとき、弘が一冊の本を見つけました。でも漢字の苦手な弘には

題名が読めません。
「美咲、おもしろそうな本なんだけど、なんて書いてあるんだ？」
「弘には無理ねえ。えーと、『きょうりゅうじまのなぞ』何かおもしろそうね」
みんなが集まってきました。
「どうした？」
「恐竜島の秘密が書かれているようなんだ。どうも……」
「なんか怖い」
すると勝が、
「よし、おもしろそうだ。本を読んで恐竜島へ行ってみようぜ」
と、さっそくリーダーシップを発揮しました。弘と健と笑美はすぐに賛成しました。でも一人だけ……。
美咲が、
「絶対いやだ」

恐竜島のなぞ

「どうして」
「だって、十数年も前から出入りが禁じられているんでしょう」
「お前、実は怖いんだな」
健が言うと、
「怖くなんかないわよ。じゃ、行きましょう」
全員で恐竜島へ行くことになりました。
「じゃ、今度の土曜日。学校に集まろう」
と、勝が決定しました。

さて、土曜日です。五人組が集まりました。勝が、
「あの恐竜島の真相をおれたちでつきとめようぜ」
と気合いを入れました。笑美が、
「どうやってあそこまで行くの」

と聞くと、健が、
「うーん。泳いでいくか。それが一番手っ取り早いし」
五人は泳ぎには自信があります。
「そうしよう」
すぐに決まりました。
波は穏やかです。五人は気持ちよく進んでいきます。が、恐竜島が近づいてきた時、急に波が高くなり、五人は不安になってきました。すると突然、サメが現れました。大きなサメは五人組に近づいてきます。五人が泳ぐのをやめると、
「早よ帰れ。危ないからここから先は行ったらあかん。あの島には恐ろしい物が住んどるさかい」
と、突然サメが関西弁でしゃべり出したので、五人はびっくりしました。でも気を取り直して、美咲が、

「恐ろしい物って何ですか」
と聞きました。
「実は、わしも知らん。ただ、わしらはそれに守られているんや」
「よし、それなら絶対確かめてやるぞ」
と、健が意気込むと、
「行ったらあかん言うとるやろ。命を落としても知らんで」
と、サメが叫びました。
「いいんです。確かめに行きたいんです」
と、勝が答えました。
「しゃあない。行ったらええ。ただ、『恐竜灯台』、これがキーワードになる。これだけは忘れたらあかんで」
サメは、五人組を見送りました。

五人はなんとか島に泳ぎ着きました。
「一体、何がいるんだろう」
「サメが言っていたよな。わしらは守られているって、どういうことだろう」
「恐竜灯台に何かありそうだな」
「よし、まずそこへ行ってみよう」
「で、それはどこにあるの……」★
その時、海からワニがあがってきて、五人組に話しかけました。
「やあ。話し声が聞こえてきたんだけど、恐竜灯台の場所を知りたいのかい？」
「知りたいですけど……あなたはだれですか？」
と、勝が聞きました。
「ぼくはこの島の動物たちのリーダーのワニ、ガブリだよ」
「そうなんだ。じゃあ、恐竜灯台の場所を教えてください」
「いいだろう。灯台は、島の真ん中にある丘のてっぺんにあるんだよ。そして、

そのまわりには海がある」
「そうなんだ。また泳ぐのか……」
と、健がため息をつくと、
「それなら、イルカとワシに連れて行ってもらったらどうかな？」
その時、海からは「バシャッ」という音。空からは「バサッバサッ」という音がしました。
見ると、イルカとワシがいました。
「さあ、行っておいで」
「行ってきます！」
五人は丘に向かって出発しました。

丘に着くと、恐竜たちが出むかえてくれました。
「ようこそ。私は恐竜のリーダー、ガプリです。まずは、いっしょにごはんを

食べないかい？」
と、ガプリが聞くと、
「食べる！」
五人は、元気よく答えました。

「お腹いっぱい」
「おいしかったね」
「さあ、どうする？」
勝が聞くと、
「もちろん、恐竜灯台へ行こうよ」
と、弘が答えました。
「いいね」
と、みんなも賛成しました。

「じゃあ、灯台へ行こう！」

「ここが灯台かあ」

「大きいなぁ」

「中に入ろうよ」

と、男子三人が言いました。

「でも……待って。トビラに取っ手がないよ。どうやって入るの？」

と、笑美が気付きました。

すると、美咲が、

「あ、こんな所にカギ穴があるよ！」

と言いました。だけど、カギがないので入れません。

「どうするの？」

みんなが困っていると、とつ然、

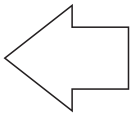
「ギィ〜ッ」
という音がして、トビラが開きました。
「あっ、トビラが開いた！　中に入ろう」
五人は一列になって灯台へ入っていきました。灯台の中には、らせん階段があって、二階に続いています。
五人は二階へ行きました。
二階には、部屋が一つありました。その部屋のトビラも一階のトビラと同じで、取っ手がなく、カギ穴が一つあります。
「ここもか」
勝がつぶやくと、また「ギィ〜ッ」と音がしてトビラが開きました。
「開いたよ」
五人が部屋へ入ると、宝箱が置いてあって、その近くにだれかがいました。
「ようこそ、恐竜灯台へ。私は、ここに住んでいる、エイジだよ。実は、君達

にたのみたい事があるんだ」
「たのみたい事？　何ですか」
「この島には昔から言い伝えがあって、『いつかこの島に五人の子がやって来て宝を使い、この島に幸せをもたらす』というんだ。そして、その五人の子というのが君達の事で、宝というのは、この箱に入っているカギの事だよ。どうだい、私のたのみをきいてくれないかい」
五人は少し考えて、
「いいよ」
と答えました。
五人はエイジに宝箱のカギをもらい、宝箱を開けました。
「わぁ」
そこには、キラキラ光るカギが入っていました。
五人は、そのカギを部屋の真ん中にあるカギ穴にさすと、目をつぶって「島

に人がたくさん来ますように」と願いました。
すると、カギから光が出てきて、その光がおさまると、カギはただのカギになっていました。
――次の日。
島にはたくさんの人が遊びに来ました。
エイジは、
「ありがとう」
とお礼を言いました。
「よかったね」
「また遊びに来ようね」

二人だけの秘密

敦賀市立赤崎小学校
六年　山本友依



各務原市立那加第一小学校
六年　黒田瑠香
都築菜津子
島津萌花

一見仲が悪いようで実はとても仲のよい小学生の姉弟がいます。その姉弟は、いろいろなところがとてもよく似ています。二人の名前は、姉がなつみ、弟がたつき。まず、名前が少し似ています。そして趣味もよく似ています。サッカーをして遊ぶのが好きなことも、ゲームが上手なのも、運動が得意なのも同じです。算数が苦手なのも、理科があまり得意でないことも似ています。

さらに、この姉弟には、似ているところがもう一つありました。それは、二人ともイタズラが大好きなことでした。

二人はこれまでに数々のイタズラをやってきました。でも、周りの人は二人がそんなにイタズラ好きだとはだれも知りません。なぜなら、それらのイタズラを家の中だけでやり、決して外ですることがなかったからです。二人はまじめで仲のよい姉弟と思われていました。

この日も、二人はイタズラをする作戦を立てていました。それには理由がありました。二、三日前、二人が家の庭で遊んでいるときに、おじいちゃんの大

事にしていた木の枝を折ってしまったのです。

「だれだあ、こんなことするやつは。わしの大事な木を折るとはけしからん」

わざとしたことではないのに、おじいちゃんにひどくしかられ、それがとてもくやしかったのです。それで、何とかしておじいちゃんを困らせたかったのです。二人は、家の中でいつもおじいちゃんが自まんしているかけ軸を捨ててしまうというイタズラを考えつきました。

そしてそれを実行してしまったのです。しかし、イタズラ作戦を実行した後、二人は初めてケンカをしました。弟のたつきが、かけ軸を間違えてしまったからです。間違えたことにすぐに気がついた姉のなつみは、ひどく怒りました。たつきは必死に謝りましたが、なつみはなかなか許してくれません。それもそのはず、破って捨ててしまったかけ軸は、おじいちゃんのではなく、おばあちゃんが大事にしていた十万円もするかけ軸だったのですから。

その日の夜、二人は、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんからうんとし

かられました。ゴミ箱にビリビリに破いて捨ててあるかけ軸を、おばあちゃんが見つけたからです。イタズラ好きの二人のしわざだということに、大人たちはすぐに気がつきました。

「もう、なんてことをしてくれるの、あなたたちは。イタズラばっかりして、許しませんよ！」

お母さんの怒りに、なつみもたつきも、ちょっと反省しました。おこづかいを出し合って、おじいちゃんとおばあちゃんに少しでも返そうと約束しました。

しかし、イタズラ大好き姉弟は、これぐらいのことではこりなかったのです。二人はある日、初めて学校でイタズラをしました。それは、なつみが考えたイタズラで、弟のたつきは乗り気ではなかったのですが……。

クラスメイトが、朝登校して教室に入る時、ビックリするように入り口の戸にしかけをしました。色とりどりのチョークを黒板消しにいっぱいに塗りたくり、それを入り口の戸にはさんで頭に落ちるようにしたのです。

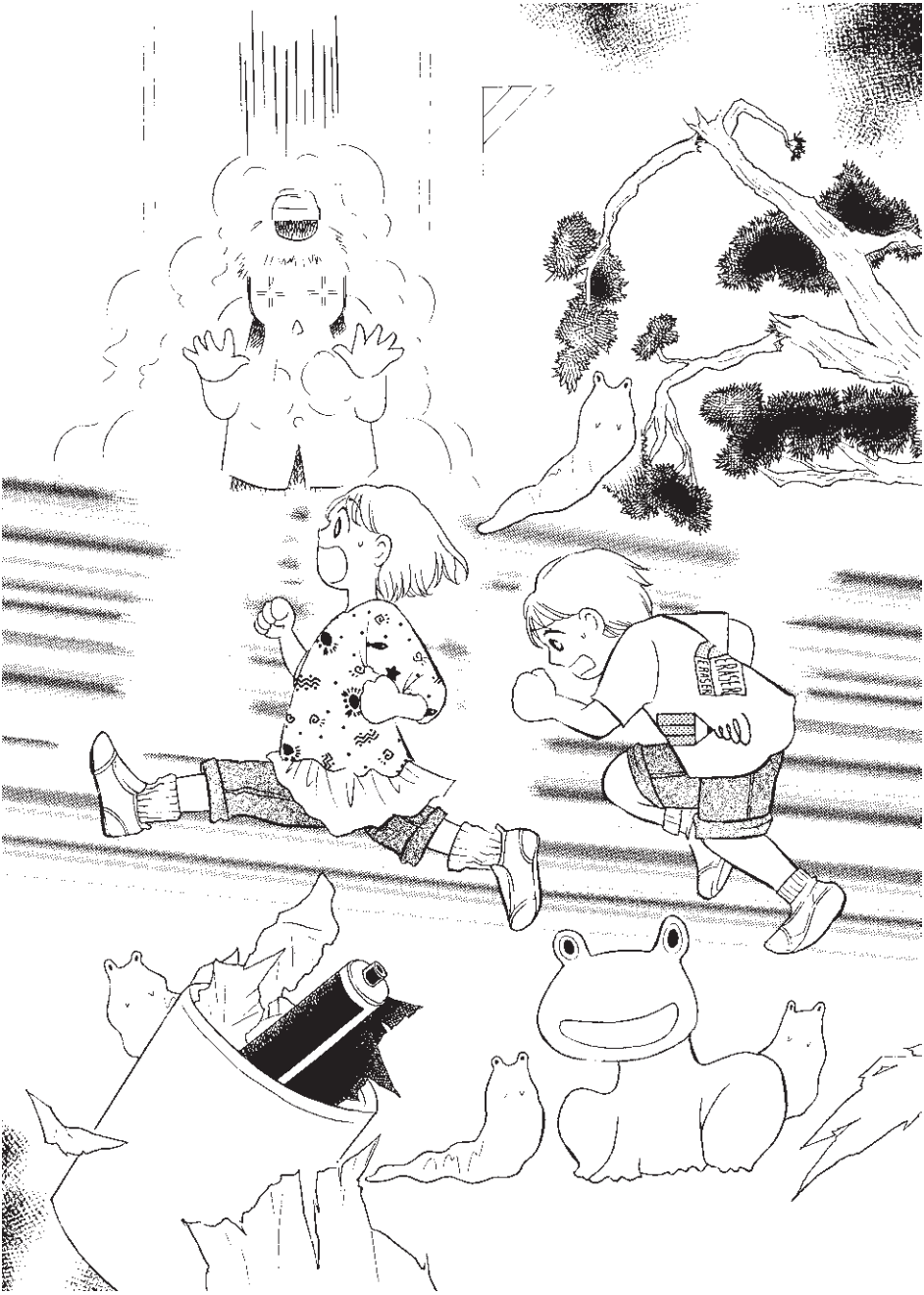
戸を開けたとたん、その子は粉まみれになってしまいました。二人はすぐにあやまりましたが、先生からひどくしかられました。たつきは、なつみのせいでしかられたと言って、怒りました。

けんかをしながらも、やっぱり仲のよい姉弟が次に考えたのが、学校の周りにも家の周りにもいっぱいいる、カエルやナメクジを使ったイタズラでした。学校の玄関には、子ども用のフタがあるくつ箱がズラッと並んでいます。そのくつ箱の中に、前の日に家の近くの田んぼで取ったカエルと、畑で集めたナメクジを入れておくという作戦です。

次の朝、二人はみんなより一足先に登校し、急いでくつ箱にカエルとナメクジを押し込み、廊下のところでそうっと様子を見ていました。あいさつをしながら普通に登校してきたみんなは、くつ箱のフタを開けたとたん、

「うわー、カエルだあ」

「きゃー、こっちにはナメクジ。気持ち悪い、たすけてー」


BASEBALL

学校中が大騒ぎになりました。校長先生も教頭先生も他の先生たちも、びっくりしている子どもたちを落ち着かせようと必死になっています。

なつみとたつきは、この大騒ぎになった様子を見て、なんだかこわくなってきました。急いで玄関から抜け出し、学校の裏にある山の登り口の方に逃げ出しました。この山は、いつも業間運動の時にマラソンで登っている山だったので、道がどうなっているか知っていたのです。しかし、学校の先生もこの地域の人たちも知らなかったのですが、実は、この山はずーっと昔から不思議なことが起こる山だったのです。★

「ハァ、ハァ……もうここまで来れば大丈夫だよね、お姉ちゃん」

なつみとたつきは、だれにも見つからないような山の上の方まで来ていました。なつみは下を見下ろし、だれかが追いかけて来ないか、じっと目を凝らしています。

すると、二人の後ろで「カサッカサカサ」という音がしました。二人は身構

えて、「音の主」が現れるのを待ちました。そして、音の主の正体を見た二人は、おどろきのあまり、動けなくなってしまいました。

なぜかというと、なつみとたつきにそっくりな二人が立っていたからです。さらに驚いたことに、その二人の体からボニャリとしたやわらかな光が放たれていました。

なつみにそっくりの女の子が言いました。

「こんにちは。私はなつきと言います。そしてこっちが……」

たつきにそっくりの男の子を指し、

「弟のたつやです」

そう言いました。名前も二人にそっくりです。

「私達はある王国の者です。あなた達姉弟がいたずら好き、と聞いてやって来ました。私達の王国に来てみませんか？」

なつみとたつきは、とても興味がわいてきました。二人とも王国に行ってみ

たくてたまりません。

すると、七色の光を放つ空間ができました。なつきとたつやは、その空間に入って行きます。なつみとたつきも急いで二人の後を追い、足をふみ入れました。

その先には、いたって変わらない風景が広がっていました。なつみとたつきは、少々おどろきました。でも、大通りに出ると、大きな城が見えました。その城の門まで行くと、なつきが、

「ようこそ、わが城へ。たつきさん、門をお開けください」

たつきが門を開けると、白い粉をかぶりました。

「ヒャー、何、何が起こったの？」

「ハハハッ。ここはいたずら王国ですよ。これぐらいはよくありますからご注意を。あと、一つ約束を守ってください。しかけた人をおこらないでくださいね」

と、たつやが言い、今度はなつきが、
「町をご案内します。行きましょう」
四人で町を歩きながら、よく見ると、落とし穴がありました。そして、お金に細い糸をつけた物まで落ちていました。キャンディを配っている人がいたので、なつみがもらって包みを開けてみると、
「キャー、む、む、虫だ！」
たつきたちは大笑いです。
なつきに、
「大丈夫ですよ。にせ物ですよ。フフフッ」
と笑われ、なつみも照れくさくなって笑いました。
そして一度、城に帰ることになりました。
城に着くと、たつやが、
「二人とも、この国は楽しかったですか？」

と聞きました。なつみとたつきが、
「はい。すっごく気に入りました」
と笑顔で答えました。すると、なつきが、
「良かった。今、ここに住んでくれる人を探しているんです。もしよければ、ここに住んでみませんか？」
「どうしよう。ここに住みたいけど、お父さん達におこられそうだから……」
「えー。お姉ちゃん、ここに住みたいよ」
「お父さんにおこられちゃってもいいの？」
「それは絶対にいや」
「でしょ。だから、なつきちゃん、たつや君、ごめんなさい。このお話、断らせてください」
「気にしないでください。親ってこわいですからね。でも一つだけ約束をしてください。あなた達の国で、もういたずらをしないって。いたずらをされると

あなた達の国の人は、みんな悲しみます。これからは二つの国を自由に行き来できるようにするので、いたずらをしたくなったらこの国でしてください」

「分かりました」

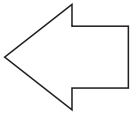
と、たつきとなつみは約束しました。

それから二人は、自分の国では、ぱったりイタズラをやめました。その代わりいたずら王国で毎日いたずらをしています。しかし、それは二人だけの秘密です。

アリの巣いじりはいけません

敦賀市立東浦小学校

六年　吉峯由夏（よしみねゆか）



各務原市立緑苑小学校

六年　佐藤（さとう）ナタリア

高下（たかした）遙（はるか）

牛丸（うしまる）綾香（あやか）

ある日のこと。五年生の羽川忍（はねかわしのぶ）と六年生の小鳥遊（たかなし）りん、佐藤未来（さとうみく）の三人組は、公園で大スキなアリの巣いじりをしていた。

〜その時〜

「やめろ」

どこからか声が聞こえた。

三人が後ろをふり返ると、きょ大なアリ（三三三センチメートル）が仁王立ちしていた。

「何をやめるんですか〜」

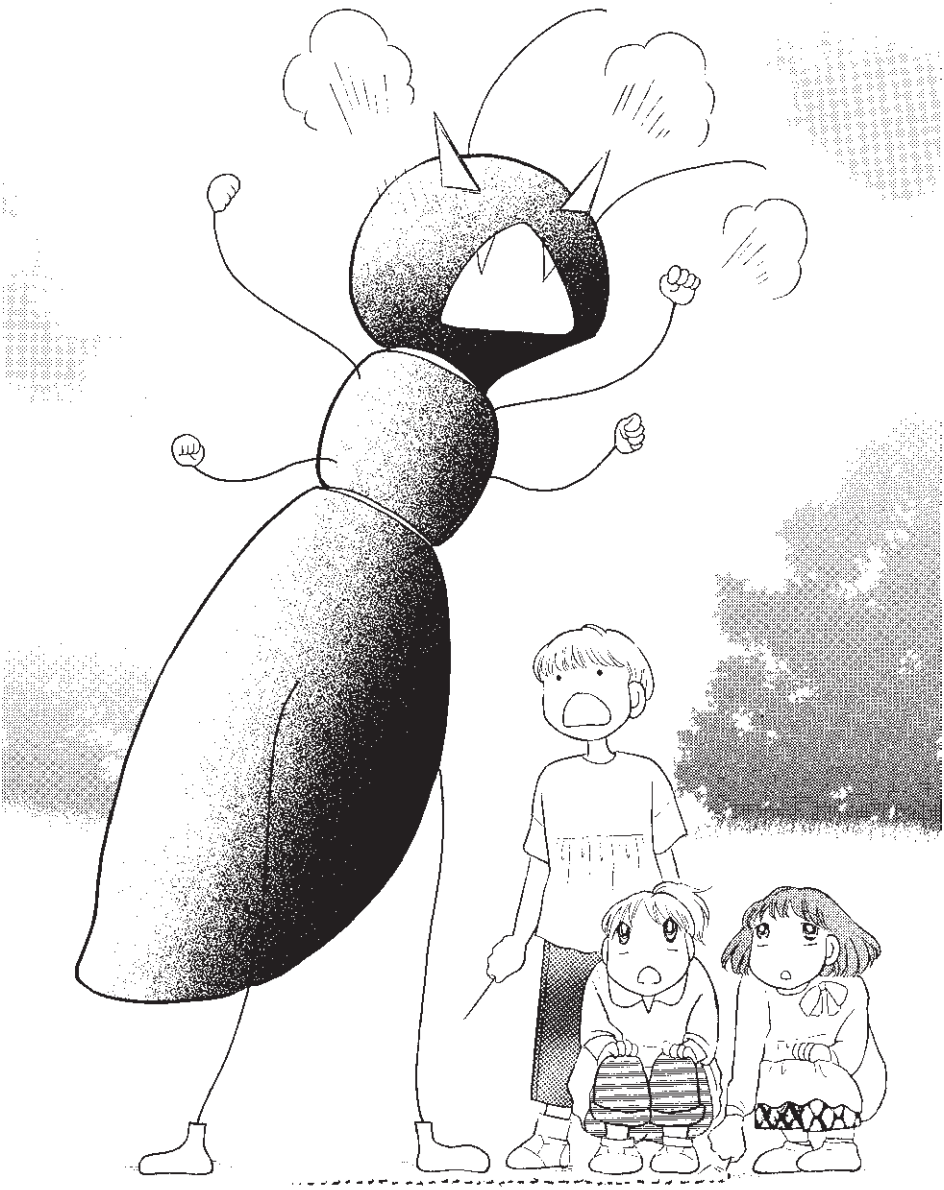
と、未来が聞くと、

「何をやめるって、そりゃアリの巣いじりだ」

「え！」

「でも、それじゃ、私たちの楽しみがなくなっちゃうじゃん」

忍が怒鳴った。



「だって、アリの巣こわされちゃ、また作り直しで疲れるし大変なんだよ。そんなの二回も作るのいやなんだよ」
「……」
「だから、これからはやめろよ！」
「ちっ、くそ」
りんが舌打ちした。
〜十秒後〜
「どうしよう。もとの体に戻れなくなっちゃった」
きょ大アリが、元の小さいアリに戻れなくなった。
「何やってんの？　アホじゃない」
「アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ」
と、みんなで笑った。
「戻る方法はないかね〜」

アリが言うと、
「私たち、戻り方さがしてあげるよ」
未来が言った。
「えっ、いいの。ありがとう」
「じゃ、さっそく考えよう」
〜三十秒後〜
「う〜ん。まったくわからん」
「もう疲れた。十二時だしはら減った。一回帰るよ」
と言うと、みんな帰ってしまい、
「どうしよう」
と、アリが困っている。
そして、十三時にみんなが戻ってきた。
「よしっ、がんばって考えるか」

シ〜ン。

「やっぱわかんねー」

と、忍が言うと、ピーンと未来のかみの毛が立った。

「いいこと思いついた！」

「みんなでアリの上に乗ればいい」

と、未来が思わず大声で叫んだ。

「アホか〜」

と、未来はアリとりんと忍におこられた。

「もっとまじめに考えてっ」

と、りんが言うと、またピーンと未来のかみの毛が立った。

「いいこと思いついた」★

「この薬を飲めばいいんだよ」

と言って、薬のびんを出してきた。

「そんなのどこに持ってたの？」
と、みんなは未来に向かって聞いた。
「まあまあいいじゃん。それより、この薬さえ飲めば元の大きさに戻れるよ」
と、未来は言う。他のみんなは、
「ええ？　本当に？」
と、未来を疑いの目で見た。
「今度はまじめに考えたから大丈夫」
と、未来は自信満々に言った。するとアリは、
「なら、飲んでみる」
と言って、びんの薬をゴクッゴクッと飲んだ。するとアリは元の大きさに戻るどころか、もっと大きくなってしまった。（四〇〇メートル）
「ちょっと、未来！　どうなってるの！　元の大きさに戻るって言ってたじゃん！」

と忍とりんがおこった。未来は、
「ごめんなさい……」
と言って落ち込んでしまった。すると忍が、
「しょうがない。ぼくが考えるよ」
と言った。
「うーん」
忍はしばらくなやんでいたが、とつ然、
「あ！」
と言って走り出した。他のみんなも急いで後を追った。
「待ってよ、忍！　どうしたの？」
と、りんと未来がそろって言った。忍は何も答えなかった。
しばらく走っていると、忍たちの前に「遊園地」と書いた大きな看板が見えてきた。忍は大きな看板をくぐるとメリーゴーランドの前で立ち止まった。

未来とりんは息を切らしながら、メリーゴーランドを見ると、まるで乗ってほしいと言わんばかりにまぶしく光り出した。

「もしかして、このメリーゴーランドに乗るの？　でもなんでこんな時に……？」

と、未来が不思議そうに聞いた。

すると、忍はメリーゴーランドに飛び乗り、

「もちろん、アリを元の姿に戻すためさ。みんなも早く乗って」

忍の答えに少しとまどいながらも、みんなはメリーゴーランドに乗り込んだ。やさしい音楽と共にゆるやかに動くメリーゴーランドに、未来とりんはうっとりしていた。

動きが止まって降りてみると、なんと忍たち全員がアリサイズになっていた。

「忍、これどういうこと？」

と、りんは不安をかくすように、強い口調で言った。

二人の様子を見ていた未来が、みんなの不安を落ち着かせるために、カフェ

へ行こうと提案した。忍たちはアリサイズになってしまったので、りんの提案でアリに乗って行くことにした。

カフェに着いて、アリを人間に変装させて店内に入ると、全員が未来のおすすめのはちみつクッキーを食べることにした。

一口サクッと食べてみると、ほんのり香るはちみつの味が口の中に広がった。

……気がつくと、いつの間にかみんな元の姿に戻っていた。

思わず三人は飛び上がった。アリもいっしょになって飛び上がり、みんなで大喜びした。

店を後にすると、みんなはアリの巣がある場所へ帰った。

すると、りんがそわそわし始めた。

「ねえ、どうしたの、りん」

「なんでもないよ、未来」

振り返ると、りんが泣いていた。

そして、みんなはアリの方を見て頭を下げた。
「アリさん、もうアリの巣いじりはぜったいにしないよ」
「本当？」
みんなが、うんとうなずくとりんが言った。
「約束するよ」
アリはうれしそうに、
「そうだね。またみんなでカフェに行こうね。じゃ、またいつかね」
アリが巣に帰って行くのを見送り、
「じゃ、私たちも帰ろう」
「うん」
未来たちがうなずいた。
夕焼けの帰り道、急に未来が止まった。
「ねえ、私たちのいじったアリの巣、大変そうだったね」

と、不安そうに言った。

「大丈夫。これからはやらなければいいってことだよ」

すると、未来の不安そうな顔がすてきな笑顔になった。

「でも今日のぼう険は、すっごく大変だったけど、楽しかったね」

こうして三人の楽しい一日が終わった。

虹の向こうには

敦賀市立中央小学校

六年

高木彩果

森下桃瑚

山村咲季

赤坂有紀

各務原市立鵜沼第二小学校

六年

本祐菜

若山実祐希

『雲の下には虹のすべり台があり、こびとはそこから人間のいる場所に行きました』

これは、こびとならだれでも知っているセリフ。今までわたしたちは、この話は空想の出来事だと思っていた。そう、あの日までは……。

「最近、四人で遊んでないよね」
「そうだよね」
「久しぶりに四人で集まろっか」
「いいね、それ」
「オッケー！」

ここは、雲の上の学校。わたしはこびとのルル。小さい頃から仲のいい、キキ、ココ、ノノとは、今でも気の合う友達。いつでもどこでも一緒にいるから、

昔はよく「四つ子みたいね」なんて言われてた。でも学校に入ってからは、みんな習い事とか用事とかでいそがしくなっちゃって、四人で遊ぶことは少なくなっていたんだ。

「ルル、聞いてる？」

「あ、ごめんごめん。で、明日でいいよね」

「場所はどこにする？」

「四つ葉公園！」

キキの問いかけに、三人の声が重なった。四つ葉公園は、わたしたちのお気に入りの場所。

「今なら、きれいなお花も咲いてるし」

「近くに、おいしいくだもののお店もあるし」

くいしんぼうのキキらしいねと、みんなで笑った。

「いいんじゃない。じゃあ、明日の十時に四つ葉公園集合ね」

久しぶりに四人で遊べることが嬉しくて、わたしたちはウキウキしながら家へ帰った。あんなことが起こるなんて、この時はまだ知らずに……。

翌日の十時。

「みんな、そろった？」

「まだだよ。キキが来てない」

「あ、本当だね。もう、キキったら、いっつもなんだから」

「おまたせ、ごめんね」

笑顔でやって来たキキに、

「もう！　三分もおくれてるよ」

って、ノノもきびしいんだから。

「もう、二人とも相変わらずなんだから。さて、何する？」

「みんなで四つ葉のクローバー探そうよ。一番早く見つけた人が勝ちね」

「オッケー」

「四つ葉のクローバー発見！　わたしの勝ち」

予想通り、一番はココ。ココったら甘えん坊のくせに、小さいときからなぜか探し物が得意なんだ。四つ葉のクローバーを見つけるのも早い。だれも、かないっこない。

「今回は勝てると思ったのにな。ああ、残念。三つ葉ならいっぱい見つけたのにな」

「わたしも。ココって、探し物得意だよね。いっつもキキの落とし物、見つけてあげてたもんね」

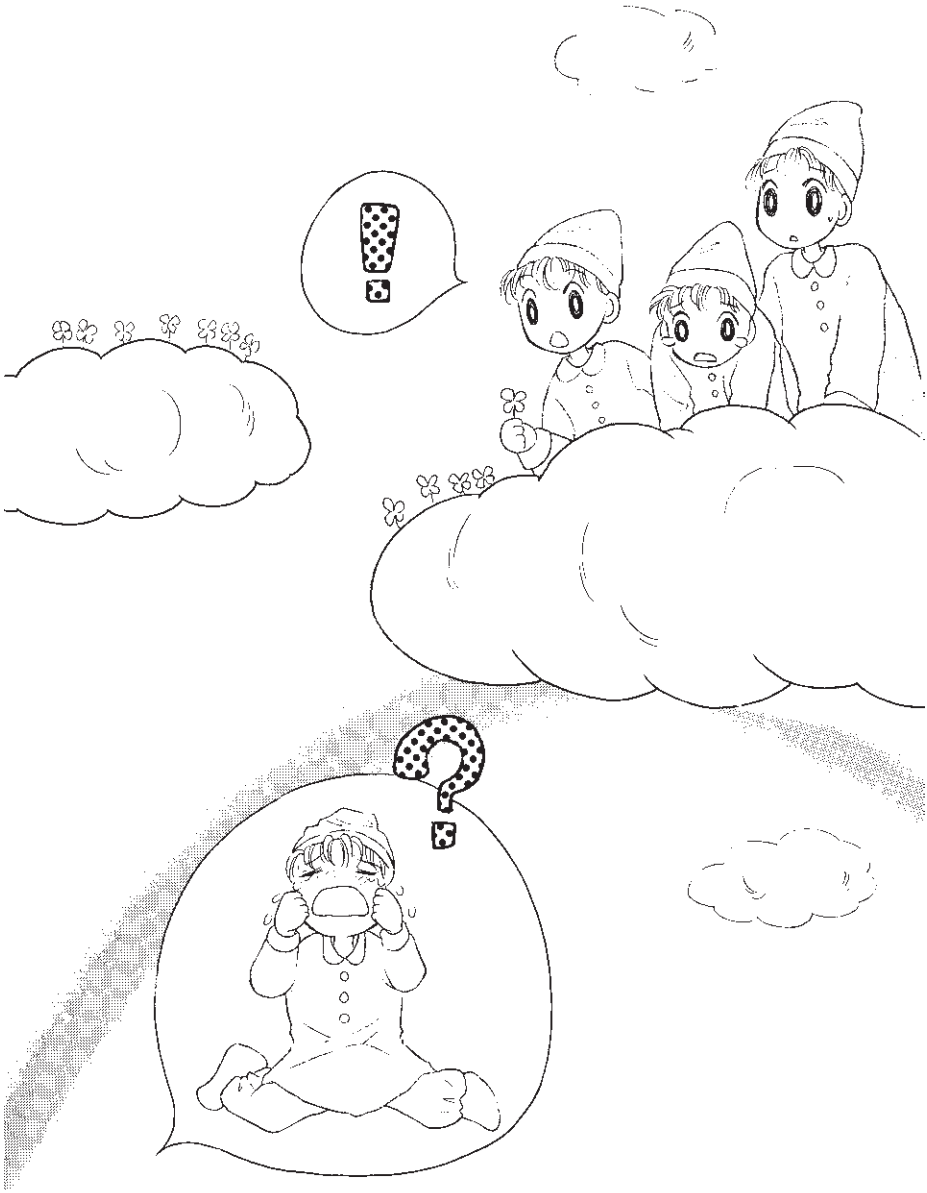
ノノも笑いながら言った。

「あれ？　ところでキキは、どこ？」

「え、いないの？　さっきまで、となりでクローバーを探してたのに」

「じゃあ、今度はキキ探しね。見つけたら、ここに集合」
「オッケー、よういー……　スタート！」

探し始めてから三十分がたった。みんなつかれて、元の場所に戻ってきた。
「キキ、どこかにいた？」
「ううん。わたしは見てない」
「わたしも見つけられなかった」
しょんぼりして下を向いた。雲の下には虹が出ていた。虹を見つめながら、ノノがつぶやく。
「もしかして……　人間界に落ちちゃったんじゃない……」
「え？　人間界って本当にあるの？」
「うん……多分」
物知りなノノが言うんだから、間違いない。



「ってことは、あの本は、あの話は……本当の話だったってこと？」
自分でも興奮しているのがわかる。こびとならだれでも知ってる、あの本のセリフが？
「じゃあ、今ごろ、キキは怖くて泣いてるわよ」
そう言うココの方が、今にも泣きそうだ。
「人間に見つかったかも？」
「よし、助けに行かなくちゃ」
「うん。……でも、どうやって？」★
私は目を伏せた。怖いけど、やっぱりコレしかない。
「私たちで探しに行くんだよ」
ノノとココが顔を上げた。
「でも……警察呼んだ方がいいんじゃ……？」
「キキがいなくなったのは、私たちにも責任があるんだから。私たち、親友で

しょ。だったら、探しに行かなきゃ」
ココがついに泣き出した。ノノが口を開く。
「もし、虹が本当に人間界に通じているなら、キキはもう戻ってこないよ……」
「だったらなおさら探さなきゃ」
私は、虹の方を見た。
思い切って飛び降りる。光に包まれ、私を呼ぶ声が遠くなっていったー。
「何コレッ」
気がつくと、草むらの中にいた。草は、見上げなければならない程背が高い。見渡す限り、草、草、草である。
その時、ドスン！　という音とともに、地面が揺れた。
こびと界は噴火が多い。
「地面が揺れたり、変な音がした時は大抵噴火だから、高い所に逃げるのよ」と、幼い頃から母に言われ続けてきた。

（高い所に逃げなきゃ）

私はとっさに、近くにあった、見上げても一番上が見えないほど大きい木によじ登った。そして……、

「はあ」

ため息をついた。

その時、後ろでガサゴソッという音がしたかと思うと、

「ルル？　ルルなんだね。こんな所にいたんだね」

いきなり、声をかけられた。

ふり向くと、キキが立っていた。

「キキ!!」

思わず私が叫ぶと、キキが言った。

「そんなに大声出さないで。それより、もうすぐ集会だよ。早く行こっ」

「えっ？　集会？」

「そうだよ」
キキは、私の手をつかむと、ダッシュした。
わけが分からずついて行くと、キキにそっくりな人が私にそっくりな人に手をつかまれている。あっちがおそらく本物のキキだ。
「あれ？」
「あれ？」
「え？」
「ん？」
四人で、顔を見合わせる。
「ルル？」
「キキ？」
「ルル？」
「キキ？」

次の瞬間、私たちは、
「えええーっ!!」
大絶叫した。
「そういえば、服が違ったね」
「そういえば……確かに、そうだね」
「え……じゃあ、あなた達、誰……？」
私がたずねると、もう一人の私が前に進み出た。
「私は花の妖精のルルです。こっちがキキ」
私の手をつかんでいるキキを指さしながら、ルルが言った。
「あなた達は？」
「私たちは雲の上のこびと界のキキと」
「ルルです」
そう言うと、「花の妖精」のキキとルルが、こう言った。

「なるほど」
「さっき虹が立ったもんね」
「どおりできれいだったわけだ」
「うん、うん」
何の話か、さっぱり分からない。
とうとうしびれを切らして、キキが聞く。
「なんの話？」
すると、キキとルルが答えてくれた。
「あのね、ここには、『丸く美しい虹がかかった時、四人の者が天から降ってくる。この四人を戻すのは、我々の中の二人だ』という言い伝えがあるの」
「君たちがその四人なんじゃない。ほら、あと二人来たし。んでもって、私たちが戻す二人」
後ろを振り向くと、ノノとココがいた。

「ノノ、ココ」
「じゃあ、戻すから目を閉じて」
言われるままに、目を閉じた。
「行け！　元の世界へ」
そうさけぶ声が、遠くで聞こえた――。
だから、私たちはあのセリフを信じているんだ。これは、四人だけの秘密だけどね。
でも、一体誰があんなセリフを考えたんだろう――。

ある転校生のヒミツ

敦賀市立敦賀西小学校
六年　阿部七海

各務原市立稲羽西小学校
六年　岩井佑樺
真田遥果
横山百代
尾関日奈子
河田和奏
永田詩織
柏川麻衣
塩﨑茉布

わたしは、三沢るん。

ある日、先生が言った。

「みんな、席につけー。転校生を紹介するぞー。入ってこい」

ガラッとドアが開いた。

「永瀬リンです。よろしくお願いします」

ショートヘアに、少しつり目のかわいらしい女の子が入ってきた。目の色が、水色できれいだった。もちろん日本人だ。

「えーと、席は……三沢の隣りな。三沢、永瀬にいろいろ教えてやってくれ」

「はい！」

永瀬さんは、わたしの隣りの席に座った。

「永瀬さん、よろしくね！」

「……」

（あれ？　返事がない。まあ、来たばっかりだし、しょうがないか）

お昼の時間になり、お弁当を持って屋上へ行った。屋上のドアを開けると、

「えっ……」

わたしは、持っていたお弁当を落としてしまった。今日、転入してきた永瀬さんがいて、耳としっぽが生えていたのだ。

「あっ……」

と永瀬さんは、あわてて耳としっぽをかくした。

「ごめん、びっくりしたよね……」

「うっ……うん」

「わたし実は、オオカミ少女なの。オオカミというよりは犬なんだけどね。家族からそう呼ばれているの」

ぽかーん。体が石みたいに固まって、足がガタガタふるえてきた。

「みんなには秘密だよ」

永瀬さんは、それだけ言って校舎の中へ入っていった。

次の日の朝、わたしは、永瀬さんがオオカミ少女だということを夢？　現実？と、食パンにかぶりつきながら考えていた。

「いってきまーす」

と、ドアを開け、門を開くと、永瀬さんが立っていた。

「いっしょに行こう」

永瀬さんは、わたしの横にならんだ。

「昨日の、永瀬さんがオオカミ少女っていうことを、くわしく教えてくれないかな」

永瀬さんは、こくっとうなずいた。

「わたしは昔、いなかに住んでいて、ある日、おいしそうな実がたくさんなっている木を見つけたんだ。母に聞いたら食べられると言ったから、わたしはその実を食べた。たぶんそれが原因で、次の日の朝、鏡を見たら、耳としっぽが生えていたの」

「そうだったんだ。ありがとう、教えてくれて」

「このことは、絶対に三沢さんとわたしだけの秘密だよ！」
「うん！　……ねえ、永瀬さん。わたしのこと、るんでいいよ」
「わかった。わたしのこともリンでいいよ！」
キーンコーンとチャイムが鳴った。
「ねえ、リン、屋上でご飯食べよ」
「うん！」
ガチャっとドアを開け、背のびをした。青い空に、わたあめみたいな白い雲。
わたしとリンは、座ってお弁当を開けた。
「あっ、たこさんウィンナー！」
「おいしー！」
「うまー！」
「おにぎりの具は、うめぼしだあ！」
とても楽しい時間だった。お弁当を食べ終わったあとは、二人でずっと空を

見ていた。
「キレーな空だね！」
「そーだね！」
とても気持ちの良い風だったので、ねむたくなった。リンを見ると寝ていた。
「あははっ、リン寝てるー！」
キーンコーンとチャイムが鳴った。
「おーい、リン起きてー。お昼終わったー」
「ふぇっ！　もう終わったの？」
「急いで！　リン！」
階段をダダダダダと下りていった。
放課後、わたしはリンと、アイスを食べに行った。
「リンは何味？」
「オレンジとチョコー。るんは？」

「イチゴとバニラー」
「オイシイ」
「ココアのアイス大好き！」
「わたしも！」
すっかり暗くなって、帰る時間になった。
「じゃねー」
「また明日ー」
次の日、わたしが学校に着くと、いきなりリンが飛びついてきた。
「どうしよう！」
「え？　何？」
「耳としっぽが、かくせなくなっちゃった」
「ええーっ！」★
「どーする？　切る？　耳としっぽ」

「えええええ！」
「じゃまじゃない？　それ」
「痛いよ！　切るのはイヤダ！」
「じゃあ、かくそ」
リンは不安そうな顔をして言った。
「どーやって？　ムリだよ」
るんは、自慢気な顔をして博士っぽく言った。
「可能であーる。カワイくファッションでかくすのであーる」
「どうして博士っぽく言ったの？　っていうかムリだって」
「だから可能であーる」
少し息を吸ってから勢いよく話した。
「カチューシャとファッションのしっぽでかくすのだ！　つまりカチューシャを耳の上にかぶせて、しっぽの上にファッションのしっぽを付ける。それで完

ぺきであーる！」
リンは勢いよくつっこんだ。
「そんな人間いないよ！　そ、それで学校生活送るの？」
るんは少し考えてリンを見て言った。
「まぁ、そうなるかなぁ」
「やだぁ、そんなの」
るんが困った顔をした。
「でも、他に方法はないんじゃない？」
「……ないね」
「じゃあ、とりあえずその方法でね」
リンは大きなため息をひとつついた。
次の日からクラスのみんなにからかわれ、サイテーサイアクの日々が続いた…。
そんなある日……。

るんが大声でさけんだ。
「あ！　耳としっぽが大きくなってる！」
「朝起きたら大きくなってて……」
リンはあせった様子だった。
「もうかくせないよ！」
「どうしよぉ～」
その次の日の朝、るんは今までで一番といってもいいくらいに目を大きく開いた。
「ええ！　ついに体まで大きくなってる！」
リンの身長は百六十センチほどに！　クラスで一番目か二番目ぐらいの背の高さである。
「本当にどうしよう」
なみだ目で言った。

「ねえ、なにか方法ない？」
「昨日考えてみたけど、いい考えがうかばなかったから、しばらくそのままでいて」
「えー」
「てゆーか、家族はどうなってるの？」
「普通だよ。木の実は私しか食べてないから」
「おとぎ話みたいだね。ん？　おとぎ話!?」
るんは、ピカーンとひらめいた。
「ええ？　何？　どうしたの？」
びっくりした様子だ。
これだ！　という顔をして、るんは言った。
「おとぎ話のマネをするんだよ！　とりあえず図書館へＧＯ！」
「え!?」

「そうゆう本をさがすの！」
図書館に行って、たくさんのおとぎ話の本を持って来た。その中に、リンにすごく似ている本があった。直す方法は〝十種類の花を焼いて食べる〟と書いてあった。
「花集めてくるね！」
そして十五分後、るんはさっそく花をジュージューと焼いた。あまりおいしそうではなかったので、リンとるんはいっしゅん引いた。
「まずそうだけれど大丈夫？　コレ」
「だ、だいじょうぶだよ！　早く食べて」
リンは勇気を出しておもいきりパクリ！
その瞬間、ピキーン！　ボヒンッ！
「リンー、どうなったぁー？」
るんはリンを見てまゆ毛を動かした。

「だれ？」
「……え？」
リンの姿が男になっていた。まちがってしまったのだ……。
「リンが男になっちゃった！」
「えっ、うそ!?」
二人でさわいでいたのを見たのは高崎青蓮（たかさきしょうれん）だった。通称あお。
あおは、こっちを見て目を見開いた。
「あ、あの、これはそのぉ～」
「なにそれぇ～。コスプレ？　オレもやる～」
「あ～そっか。あおは天然だったわ」
もちろん自覚なし。
次の日、変装をして学校に行くと、あおが自慢気に言っていた。
「昨日さぁ、永瀬と三沢がさぁ～」

「わぁ～。ス、ストップ」
と慌てて叫んだ瞬間、
「おーい、永瀬。ちょっと理科室に来い。あ、三沢もな」
「はいっ!!」
理科の先生に呼び出されてしまった。
「なんでしょうか」
「実は、永瀬の秘密を知っているんだ」
「え!?」
「先生は研究者で、君のような人を研究しているんだ。いろいろ調べたいんだが、協力してくれないか？」
「うそ!?　先生が研究者？」
「私達が得することはあるんですか？」
「君がふつうの人間に戻れるかもしれない」

「本当ですか!?」
二人は顔を見合わせた。
「明日の午後二時から校庭でコスプレ大会があるんだ。それに出てくれないか？」
「なぜですか？」
「優勝賞品のめずらしい果物に、直る成分が入っているんだ。できたら薬はわたす。どうだ？」
「引き受けます！」
二人の声はぴったりそろった。
「それにしても何にしよう。コスプレ……」
「永瀬にはあれがあるじゃないか。あれあれ」
「え。あ、あぁ。男装……で、すか……？」
次の日、るんとリンは男装して校庭へ行った。
エントリーしたのは三組。るんとリンは上手くいっていたのに……ハプニン

グ発生!!　なんとリンの耳としっぽが出てしまったのだ!!　ところが、それが好評でみごと優勝した。

「やったあぁ〜！　これで元に戻れるね」

「うん!!」

その後、賞品の果物で先生に作ってもらった薬を飲むと、リンはようやくふつうの人間に戻ることができた。

そこでるんは、はっと目が覚めた。

「夢か……」

とつぶやき、いつものように学校へ行った。そして、席に着くと、

ガラガラガラッ。

「みんな〜、転校生を紹介するぞ」

「永瀬リンです。よろしくお願いします」

短い髪に水色でつり目の女の子が立っていた。

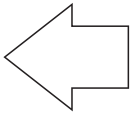
不思議な国

敦賀市立中郷小学校

六年　藤井風歌

沓掛玲奈

楠葵衣



各務原市立蘇原第一小学校

六年　園田智代

大堀真琴

丹羽美月

富田香と赤井奈々歌は、仲の良い六年生の女の子です。学校でも、家へ帰ってもよく一緒に遊んでいました。

ある夏の暑い日、二人はいつものように公園で鬼ごっこをしていました。奈々歌が香を追いかけていると、噴水の近くでキラリと光るものを見つけました。

「香。なんか光るものがあるよ。来てみて」

と、奈々歌が香を呼びます。香は急いで奈々歌のもとへやってきて、奈々歌が指さす方をのぞき込みました。

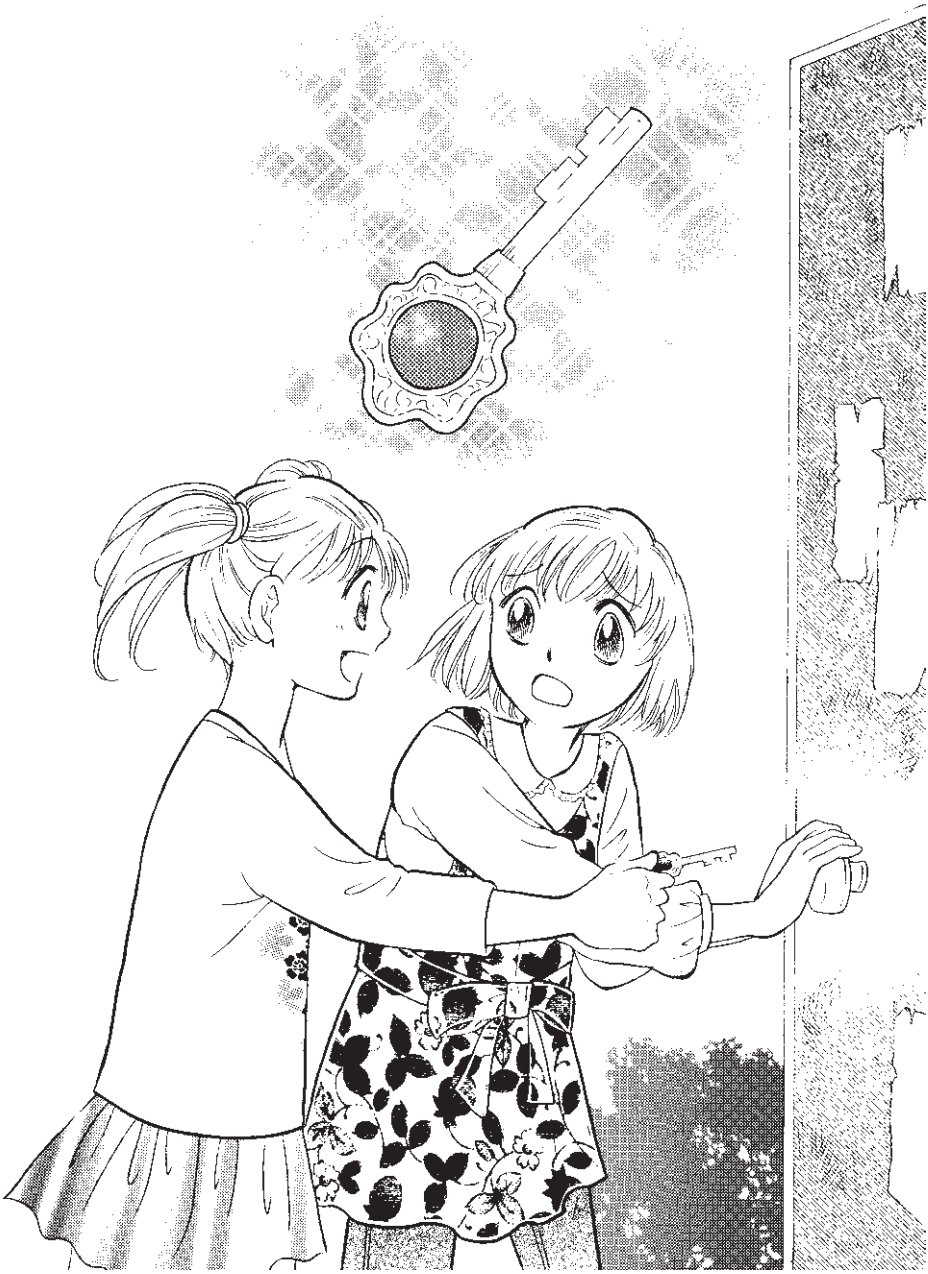
「あ、鍵じゃん」

それは赤い宝石がついた小さな鍵でした。香が鍵に手を触れると……。

いきなり二人の目の前にさびたドアが現れました。

そのドアは映画館の入り口みたいで、ノブの下には、先ほど見つけた鍵がぴっ

たり合いそうな鍵穴が付いています。
「さしてみる？」
香が言うと、奈々歌はちょっとためらいがちに、
「え、やめておこうよ」
と答えました。好奇心旺盛な香は、
「どうして？」
と言いながら、鍵を鍵穴にさし込もうとします。
「もしかしたら、危険な場所に続いているかも」
と、奈々歌は鍵穴を手でふさいで言いました。
「危険だったら、逃げて戻ればいいよ」
と、香に説得された奈々歌は、
「じゃあ、やってみようか」
と、鍵穴をふさいでいた手を動かしました。



香が鍵穴に鍵をさし込むと、風が吹いて二人ともドアの向こう側へ吸い込まれてしまいました。驚いた二人は思わず目を閉じてしまい、風がやんで目を開けた時には、知らない世界に迷い込んでいたのでした。

辺りを見回していると、甘いにおいが漂ってきます。周りにある木々をよく見ると、それは木ではありません。幹はビスケット、実はグミ、そして花はキャンディーなのです。香と奈々歌は驚いて、お菓子でできた木々の間を進んでいきました。するとその先には、川が流れていました。その川はオレンジ色の水が流れています。

「これって、もしかして」

と、香が川に手を入れてすくい、においをかいでみるとオレンジジュースの香りがします。

ここはなんとお菓子の国だったのです。

「食べていいかな」

と奈々歌。
「いいんじゃない？　こんなにいっぱいあるんだし」
と香。
「じゃあ、食べようか」
香と奈々歌は、お菓子の国のお菓子を食べ始めました。

夢中になってお菓子を食べていたら、いつの間にか日が暮れてきました。
「もう、こんな時間だ」
と香。
「そろそろ、帰らなくちゃ」
「そうだね。もう甘いものはいらないや」
「今日、お母さんが夕食は野菜シチューって言っていたし。甘いものではないものも食べたいな」

二人は、もと来た道を歩き始めました。ところが、さっきのドアがいつの間にか無くなっています。

「ドアは、どこへいったの？」

と、心配そうな奈々歌。すると香が、

「もしかしたら、道を間違えて来てしまったのかな。ねえ奈々歌、もう一度ドアのあった場所を探そうよ」

香は奈々歌を励ましながら、二人一緒に道を歩いて、ドアを探しました。でもやっぱりドアは見つかりません。

「どうしよう」

「このままだったら、家へ帰れないよ」

二人はどんどん、どんどんお菓子の国の奥へ進んでいき、知らないうちに不気味な森の中へ足を踏み入れてしまいました。

そこは、先ほどのような甘いにおいではなく、くさったお菓子のにおいが立

ちこめています。カビの生えたビスケットや、粉々になったキャンディーが辺りに散らばっていました。

二人が泣き出しそうな表情で歩き続けていると、目の前に薄水色のきれいな羽を持った親指ぐらいの妖精が現れ、

「おい、君たちはここでなにしているのだい」

と声を掛けてきました。二人はその妖精に公園で起こったことから、お菓子の森で迷ってしまったことまで全てを夢中になって話しました。

「お菓子も美味しいんだけど、もう飽きちゃったから、家へ帰りたいの。お願い、私たちを元の世界に戻して」

奈々歌が妖精に向かって言うと、それまで目を閉じて話を聞いていた妖精は、じっと香と奈々歌の目を見て、

「なるほど、君たちの事情はよく分かったよ。大変だったね。この森は危険なんだ。だから君たちは、元の世界に戻った方がいいと思うよ。でも元の世界へ

の戻り方を僕は知らないから、女王様に聞いてみるといいよ。女王様の所まで案内してあげよう」
と、言ってくれました。
香と奈々歌は、この妖精の言葉に大喜び。早速女王様がいるという場所へ連れて行ってもらうことにしました。★
その時です。妖精に電話がかかってきました。
「はい。こちら妖精ですが、あっ、ボス、すみません。はい、もうしばらくお待ちください。今ですねえー、女王様の城に向かう道具として、ちょうどよい少女たちを見つけたんです。どうにか、そいつらを利用して城まで行きますので……。もうしばらくお待ちください」
奈々歌と香は、電話の内容を聞いてしまいました。思わず、香が、
「今の話、本当なの？」
と聞くと、

「おまえたち、聞いてたな」
香と奈々歌は、妖精の魔法でロープでしばられてしまいました。香が泣きながらさけびました。
「だれでもいいから、助けて！」
その時です。見知らぬマントの男が現れ、香と奈々歌のロープをほどいてくれました。マントの男は、
「香、だいじょうぶか？　おれが、おまえを守ってやる」
そう香に伝え、どこかへ行ってしまいました。香が、ポカーンとしていると、妖精がまた香と奈々歌をロープでしばろうとしました。
「香、逃げるよ」
と奈々歌に言われ、二人で急いで逃げました。
二人は、今までにないスピードで走って行きます。やがて、香のスピードが落ちていきました。奈々歌もそれに合わせてゆっくり走ります。

「もう、疲れたよー」

とうとう香が止まりました。辺りを見ると、おいしそうなお菓子ばかりで、どうやら不気味な森は抜け出したようです。そこで二人は、近くにあったオレンジジュースの川のほとりでひと休みすることにしました。すると、奈々歌が、

「あそこにいるのって……」

と、川の向かい側を指差しました。そこには、ピンクの羽の妖精と黄色の羽の妖精が仲良く川のオレンジジュースを飲んでいました。香が不安そうに、

「さっきの妖精の仲間じゃないかな？」

と言いました。その言葉を聞いた奈々歌も不安になってきました。すると妖精たちが香たちに気付きました。そして、川を渡り、香たちの目の前までやってきました。おびえている香たちの顔を見て、ピンクの羽の妖精が、

「どうしたの？　何かあった？」

と、やさしく話しかけてくれました。香たちは、今まで起きた事、薄水色の妖

精の事を全て話しました。その話を聞き終わった黄色の羽の妖精は、
「薄水色の羽の妖精は、本当はいい子だったけど、真っ黒な妖精につかまってから、よく魔法でお菓子をくさらせるようになったの。女王様もこれには、すごく困っているの」
と言いました。ピンクの羽の妖精が、
「女王様のいるお城まで、私たちが案内してあげるわ」
と言ってほほ笑みました。香たちは、妖精のことを信じて、お城に向かうことにしました。
歩き始めて数時間、もう香たちは、へとへとでした。
「まだなの～？」
と、奈々歌が暗い声で言いました。ピンクの羽の妖精が、
「大丈夫。あの山を越えたら着くよ」
と笑いました。二人はその言葉を聞くと、

「えぇ!!」
と叫びました。それを聞いた黄色の羽の妖精が、
「うそつかないの！　もう五分くらいで着くわよ」
と言いました。二人は、
「よかった～」
とひと安心しました。それから五分くらいたち、やっとお城に着きました。
そこはとても大きくて、甘いケーキのにおいのする、豪華なお城だったのです。
お城に入ると、
「助けてー」
女の人の叫び声が聞こえてきました。香と奈々歌は、声の聞こえて来た方へ走って行きました。
すると、とっても大きな扉の前に着きました。どうやら、この中に女王様がいるらしいのです。中に入ると、女王様が薄水色の妖精と真っ黒な妖精につか

まっていました。二人は女王様を助けようとしましたが、すぐにつかまってしまいました。

（ああ、助けて！）

香は、初恋の良志のことを思いました。

すると、すぐに、あのマントの男が現れました。香が、

「も……しかして……良志？」

と言うと、その男はマントを取って、

「ああ。君を助けに来た！」

と言うと、あっと言う間に薄水色の妖精と真っ黒な妖精を倒してしまいました。

女王様と香と奈々歌は無事解放されました。香が、

「どうしてここに？」

と聞くと、良志が話し出しました。

「今日の昼ごろ、部屋にいたら、急に大きなドアが現れて、そこに『香と奈々

歌が危険です。助けに行ってください』っていう紙がはってあったんだ。で、ドアの中に入ったってわけ」

香が、

「ありがとう！　本当に！　で、マントは？」

「あぁ。マントはいつの間にか……」

その時、女王様がこう言いました。

「こんなことが二度と起きないように」

と言って、窓を開けて、あのくさったお菓子の森の方に向かってつえを振りました。

するとどうでしょう。くさったお菓子が無くなって、全部おいしそうなお菓子に変わりました。

そして薄水色の妖精と真っ黒な妖精の方に向かって、もう一度つえを振りました。すると、光が妖精たちの体の中に入っていき、妖精たちの顔が笑顔になり、二人ともよい妖精になりました。妖精たちは、

「ごめんなさい。本当に申し訳ないことをしました」
と謝りました。急に謝られた二人は、びっくりしましたが、すぐに許しました。
ところで、さっきから、香はずっと良志の方を見ています。それに気付いた奈々歌は、香の肩をトンと押して、小さい声で、
「ガンバレ！」
と言いました。香の心臓がはげしく動いています。そして、ついに、
「ね……ねぇ、良志。私……私、良志のことが好きなの！」
と言いました。良志は顔を真っ赤にして、目をそらしましたが、すぐ香の方を向いて、少し迷ってから、
「おれもだ！」
と言って、ニコッと笑いました。
それから、女王様にドアを開けてもらって、三人はもとの世界に無事もどることが出来ました。

本をひらくと

敦賀市立咸新小学校

六年　小西沙歩

田辺明日美

各務原市立鵜沼第三小学校

六年　中谷彩華

鈴木芹菜

纐纈里奈

私、礼奈。

今みんなと宿題をしている。でも、実はみんなにかくしていることがある。それは、私が魔女だということ。魔女だということをかくして学校に通っているのには理由がある。それは、魔女の世界の本を人間の世界で探さなくてはいけないからだ。

数ヶ月前、魔女の世界から、本の場所の手がかりが書いてある手紙が送られてきた。手紙には、

『〜礼奈へ〜　例の本は、星南小学校の図書室にあることがわかった。至急、星南小学校へ向かい、本を探し出せ』

と書かれていた。その手紙を読んだ私は、星南小学校へ転校することにした。

転校してから一ヶ月過ぎた今日は、宿題が終わったら一人で図書室に行きたいと思っていた。でも、宿題が終わらない……。三十分後、やっと宿題が終わった私は、帰るフリをして、少し行ったところで引き返し、図書室に向かった。

図書室に入ったら、なぜか一匹のネコがいた。
「ミャー、ミャー」
私は、ネコがこんにちはと言っているのが分かった。急にネコの言葉が分かるようになったので、声を録音しようと思い、教室にあるラジカセを持ってきた。
「こんにちは」
と言って録音し、再生ボタンをプチッとおした。すると、
「ミャー、ミャー」
ネコ語（？）になっていた。
「あなたはどこのネコ？」
と聞いてみると、
「魔女の世界のアニマルランドからやってきたぺぺといいます」
私は心の中で、（えっ？）と思った。
「なぜ人間の世界にいるの？」

「私は、星南小学校の図書室の先生に飼われているペットです。生徒の来る昼休みは、本だなの裏にかくれているんです」

今まで見たことがなかったので、びっくりした私は、

「へえ」

という言葉しか出てこなかったが、早速本のことを聞いてみた。

「ねえぺぺ、魔女の世界の本ってどこにあるか知ってる？」

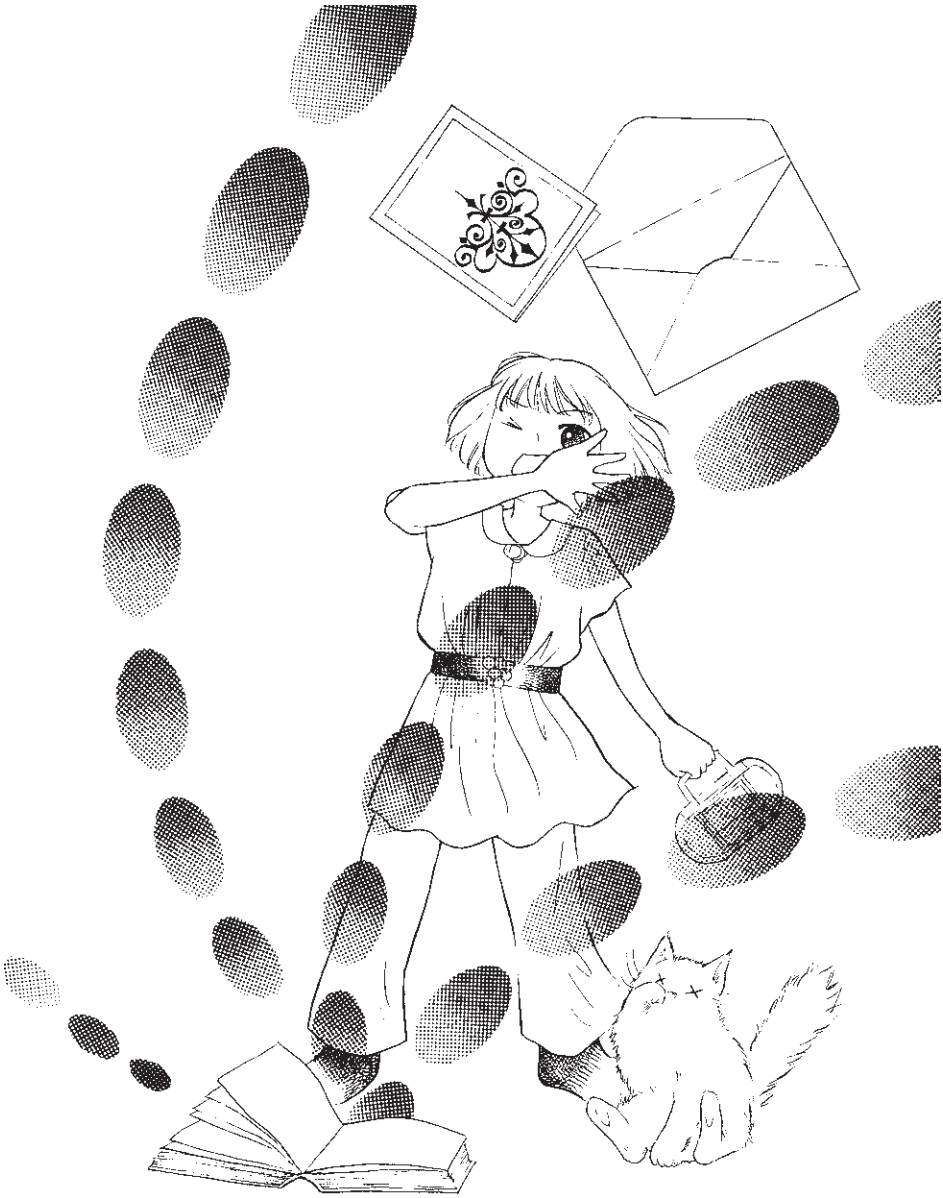
「はい。知っています。確かBの本だなの裏のかくし倉庫にあると思います」

「ありがとう。本だなってどかせる？」

「はい。倉庫よ、開け！」

ぺぺがそう言ったとたんに倉庫が開いた。中には、一冊の本が立てかけてあった。私はその本を手に取って表紙をめくろうとした。その時ふっと、お母さんが前に言った言葉がよみがえった。「本をあつかう時は気をつけなさい」そう言っていたような……。

「あっ」
バサッ。私は手をすべらせて、本を落としてしまった。
すると、急にまぶしい光におおわれた。
「なっ、何？」
目が覚めたとき、私はどこまでも広い原っぱにいた。
「ここ、どこだろう」
「礼奈さ〜ん」
そう言いながら一匹のネコが走ってきた。
「あれは確か……そうだ！　ぺぺ……なぜあなたがいるの？」
と聞くと、
「私はあの時イヤな予感がしたので、礼奈さんの後をつけて行ったんです。そうしたら、礼奈さんが光に包まれていくのが見えて……だから私も飛び込んで来たんです」



「そうだったんだ」

私はおどろいた。だって、今まで私のことを心配してくれる人はあまりいなかったから。お母さんは魔女で毎日仕事だし、お父さんはもう何ヶ月も仕事で家にはいない。そんな私を心配してくれる人は、おばあちゃんだけだったのだ。おばあちゃんは、魔女歴四十五年の大ベテラン。今は大事な任務があるとかで何ヶ月も会っていない。

ところが、この前おばあちゃんにぐう然会った。そう、ここ星南小学校の図書室で。おばあちゃんは図書室の先生をしていたのだ。あれにはびっくりだった。

でも今はそれどころではない。いったいここはどこなんだろう。★

少し歩いて行くと、森が見えてきた。森の中にだれかいる。あの人に、ここはどこなのか聞いてみよう。人影のある方へ行くと、突然ぺぺが言った。

「礼奈さん。もしかしたら悪い人かもしれないので、一応、姿を消していきま

しょう」
「そうだね。じゃあ、ナヒーン！」
私は透明人間になる魔法をかけた。
「ぺぺ、行くよ」
森の中へ入ると、ドレスを着た女の人と、かりゅうどのような人が、一緒に歩いていた。すると二人は立ち止まって、話し始めた。
「白雪姫。おきさき様の命令で、私はあなたを殺さなければなりません」
かりゅうどのような人が、相手を白雪姫と呼んでいる。
（白雪姫？　私達、白雪姫の世界に入ってしまったの？）
私は、白雪姫の物語を思い出した。たしか、この後、白雪姫はかりゅうどに殺されそうになるけど、助かるんだよね？
すると白雪姫が、
「どうか、命だけは助けてください」

と、かりゅうどにたのんだ。
ふつうなら、ここで助かるけど……。
かりゅうどは、ナイフをふり上げた。
「このままだったら、白雪姫が殺されちゃう。どうしよう、ぺぺ」
「礼奈さんの使える魔法は何ですか」
「時間を止める魔法と、透明人間になる魔法と、物を動かす魔法しか使えないの」
「じゃあ、急いで時間を止めてください。白雪姫が殺されてしまう」
「ナヒーン　ガリー！」
あと少しでナイフが白雪姫にささりそうな所で、時間が止まった。すると、ぺぺが言った。
「ナイフを取ってください」
私は、すぐにかりゅうどの手からナイフを取り上げた。このままだと危ないから、白雪姫を動かした。そして、私は時間を元にもどす魔法をかけた。

「リガンヒナー」
そして、時間は元にもどった。
かりゅうどは大きな声をあげ、何も持っていない手を振り下ろした。そして、
「ナイフが無いぞ！」
と、さわいでいる。
「白雪姫、にげて！」
私は思わす、さけんでしまった。白雪姫は私の声を聞いて、森の奥へにげて行った。
かりゅうどは、
「おきさき様に怒られてしまう。どうしよう――」
と言いながら、どこかに向かって歩いて行った。
「よかった。白雪姫が助かった！」
私とぺぺが一緒に喜んでいると、またまぶしい光におおわれた。

「礼奈、礼奈！　大丈夫？」
だれかの大きな声で、私は目が覚めた。目を開けると、そこにはおばあちゃんがいた。
「おばあちゃん！　あれ、ぺぺは？」
まさかぺぺ、白雪姫の世界に残ってしまったの？
「おばあちゃん、どうしよう。ぺぺが……」
私は、今まであったことを全て、おばあちゃんに話した。
「がんばったね、礼奈」
「えっ、何で」
おばあちゃんは話してくれた。魔女の世界の本が人間の世界に来ると、話の結末がとても悲しくなること。だから、人間の世界にある本を集めて、本の内容を元にもどす必要があること。それは、私のような見習いの魔女がやらなく

てはいけないということ。
「そうだったのか」
私は、うなずきながら言った。
「そういえば、ぺぺは？」
「ぺぺは……」
おばあちゃんは私の耳元でささやいた。
「えっ？　ぺぺって、おばあちゃんだったの？」
おばあちゃんは、にっこりほほえんだ。
「礼奈、手紙が来てるわよ。次は、星北小学校よ」
「えっー！　ぺぺもいっしょに来てくれるの」
「ニャーン」
答えたのは、おばあちゃんではなくぺぺだった。

レンのネがい

敦賀市立敦賀北小学校

六年

岩田紗季
奥村侑以
江村梨紗子
中溝琉伽
村井杏
矢口歩生

各務原市立中央小学校

六年

細貝春菜
遠山雅琴

人間界のある町に、一人の魔女と一人の頭のいい妖精がいました。魔女の名はエリー、妖精の名はノノといいました。

ある日、レンと名乗る不思議な男の子がやって来ました。表情のない彼は、同じく表情のない声で、

「母ノ病気ヲ早ク治シテ、楽ニさせテあゲたい。だカラ、薬ヲ作っテクださイ」

と言いました。エリーは困りました。病気が楽になるための薬の材料は、なかなか手に入らない特別な物です。材料は手元に一つもありません。取りに行くのにも時間がかかります。しかも、この子はなんだか得体が知れません。しかし、不思議に思いながらも無視するわけにもいかないので、ノノと仲間の妖精たちに探しに行ってもらうことにしました。すると、この少年は、

「ボくも、行キタい」

と言い出しました。仕方がないのでエリーはノノに、

「この子を連れて、仲間の妖精たちと一緒に薬の材料を取ってきてね。場所は、

水殿、氷塔、風の間だよ。それぞれの場所で仲間の妖精たちと協力して材料を探してきてね。材料は、水殿から水花と幻の泉、氷塔から氷のダイヤと氷涙、風の間から雲の綿と雲りんごだよ。この子には、『浮遊クリーム』をぬってやりなさい。では、気をつけて行ってきなさい」

と言って、ノノに地図をわたしました。

二人は外に出ました。すると男の子はすたすたと歩き出しました。ノノはあわてました。

「ちょっと待って！　その先はがけだよ。このクリームを……」

と言っているうちに、信じられない光景が目に飛び込んできました。男の子が宙に浮いているのです。ノノはびっくりしました。いつの間にクリームをぬったのだろうと思いましたが、あれこれ考える時間もなかったので、首をかしげながら地図の通りに進んでいきました。

水殿に着きました。すると一人の妖精が（あなた達、だれ？）という顔をして言いました。

「何をしにきたの……って、ノノじゃない！」

ノノがわけを話すと、水殿にいた妖精ミミはにっこり笑って、材料探しに協力してくれることになりました。するとノノが、

「探す材料は二つあるから手分けして探そうよ。そうすれば早く見つけられるからね」

と言って、水殿に詳しいミミとレン少年で幻の泉を、ノノは水花を探すことにしました。ミミは、

「じゃあ、レン君、探しに行こうか」

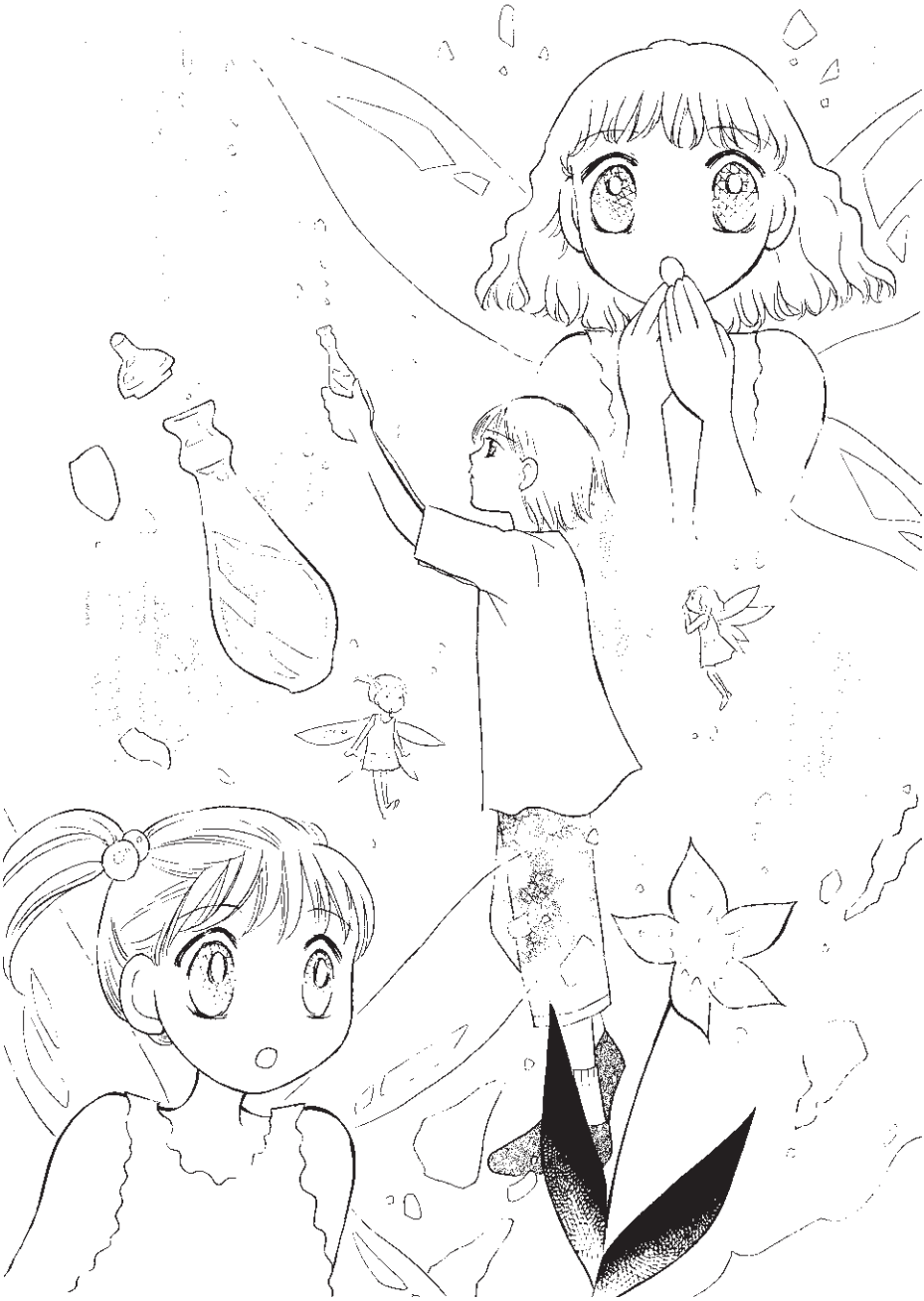
と言って、手を引っ張って飛び立ち、水殿の北の方へ幻の泉を探しに向かいました。一方でノノは東の方へ水花を探しに行きました。しばらくすると霧が濃くなってきて、目の前がかすんできました。

ミミとレン少年は何とか北の方へ来ましたが、なかなか泉が見つかりません。霧がだんだんと濃くなり、視界も悪くなってきましたが、頑張って幻の泉を探しました。地図の通りならばこの辺りのはずなのですが、それらしいものは見えませんでした。すると、レンがすっと歩き出したかと思うと前を指さして、

「ココに、アるヨ」

と言って、クリスタルのビンを取り出すとふたを開け、何もない場所に向けて差し出しました。すると、ビンにはみるみるうちに水が入ってきました。ミミはびっくりしました。ミミには何も見えなかったからです。どうしてこの子には幻の泉が見えたのだろう……。

そのころ、東の方では大変なことが起こっていました。なんと、水花やその周りの花が次々と枯れていったのです。ノノがどうしようとあたふたしているうちに、幻の泉から二人が駆けつけました。ノノはこれが探していた水花だと



いうことと、急に枯れてしまったことを二人に説明しました。すると、レンが先ほどのクリスタルのビンを取り出し、二人の妖精が止める間もなく、枯れてしまった水花に向かって水をかけ始めました。するとどうでしょう。水花はみるみる生気を回復し、きれいな花を咲かせました。しかも、不思議なことに、クリスタルのビンの中の水も全然減っていません。

「コレで、そロいマしタ。早ク次ニ行きマしょウ」

あ然としている妖精たちを尻目に、レンは地図を見ることなく、地図通りの方向に向かって進んで行きました。ノノはミミに別れを告げると、急いで後を追いかけました。

氷塔へ着きました。するとまた一人の妖精が、

「ノノちゃーん。久しぶりー」

と言って走ってきました。かけ寄ってきた妖精ココにノノはわけを話し、協力

を頼みました。そして、三人で材料探しに出かけました。
最初に探したのは氷のダイヤ。氷山から削り取るだけなので、とても簡単に手に入りました。ところが問題は氷涙。これは氷姫の涙の宝石なので、まずは氷姫を探し出さねばなりません。さっそく氷姫を探し始めましたが、探せど探せど見つかりません。探し疲れたころ、ココが、
「ほんとに氷姫なんているの？」
と言いました。すると、前の方でガサガサと何かが動きました。★
とつ然、小さな女の子がすごい勢いで走って来ました。よけることもできずに、ココと少女はぶつかってしまいました。
「ゴチンッ」
と、大きな音がして額をおさえながらココはその場にうずくまりました。ノノが、（大丈夫？）という顔でココの近くにかけよって来ました。
「いった〜い。ごめんなさい。大丈夫ですか？」

と、ココが顔を上げると、奥の方から何者かが現れました。
「見つけました！　女王様」
「女王」と呼ばれた人が、
「ありがとう。でも、ウル、だめでしょう。あなたは氷姫になったのだから、姫として態度をつつしみなさい」
と言いました。不思議に思ったノノたちは、女王様らしき人に聞いてみました。
「そのウルというのは、だれのことですか？」
すると、しゃがみこんでいた八才くらいの女の子が、
「いったいなあ～。よければよかったのに。ウルはあたしのことだけど……。それより、あなた達何をしに来たの？」
と質問しました。ノノたちは顔を見合わせ、
「ね、ねえ、あなた、本当に氷姫なんだよね」
「だから、そうだって言ってるでしょ」

すると、レンがとつ然、
「氷姫ノ涙ヲクダさい」
と言いました。氷姫は納得したように、
「そうだったの。それなら、城にあると思うから、ちょっと待っててね」
と、すごい勢いで走って行きました。
――ウルは3分もたたない間にもどって来ると、ビンに入った氷涙をわたしてくれました。ノノたちはそれを受け取るとお礼を言い、と中でココと別れて風の間へ急ぎました。

風の間に着くと、
「おそかったじゃん。わけはミミから聞いてるよ。まずは雲の綿から探そう。今日は、雲のパーティをしているから、参加している人に聞いてみよう」
と妖精ララが言いました。歩き始めて間もなく、雲の綿が空にういていたので、

すぐ手に入りました。
ララたちは一度パーティー会場にもどって参加している人たちに、
「雲りんごを知りませんか」
と聞いてみました。
「雲りんご？　それなら、ほら、そこに売っているじゃないか」
と、指をさした方向を見ると、『雲りんご』と書かれた屋台がありました。ノノたちはその人にお礼を言うと、屋台に向かって走って行きました。三人は雲りんごを買い、ララと別れました。
帰り道、さっきまで一緒にいたはずのレンの姿がありません。ノノは、
「途中で家に帰ったのかなぁ……」
とあまり深く考えず、エリーのもとへ帰りました。
エリーはノノが持ち帰った材料で薬を作り、レンの家へ届けました。
――それから半年後――

エリーたち五人はウルとすっかり仲良くなり、氷塔に遊びに行っていました。暗くなってきたのでエリーたちは、
「それじゃあね。バイバイ、ウル」
と言って帰りました。
帰り道、ノノたちはばったりレンのお母さんに会いました。レンのお母さんは、
「この前は、本当にありがとうございました」
と、頭を下げてお礼を言いました。ノノは、
「いえいえ、それよりレンくんは元気でいますか」
と言いました。
「えっ！　な、何の事ですか？」
と、お母さんがびっくりして言いました。
「だって、お母さんの病気のことはレンくんに聞いたんですよ」

とノノが言うと、お母さんが言いました。

「レンは、一年前に交通事故にあって、亡くなったのですよ。それなのに、何でレンが……」

すると、目の前にレンが現れ、ニッコリしながら言いました。

「エリー、ノノ、ミミ、ココ、ララ、オつかレサま。コレでボくも安心シて、母タちを見守レル。ボクのネがいヲ聞イてくレテ本当ニ、本当ニ、アリがトウ」

ティロと魔法の本

敦賀市立敦賀南小学校

六年　福田創士

各務原市立稲羽東小学校

六年　垣下ふたみ

河村羽流

丹羽竜樹

田中里奈

俺は野崎和正。小学六年生。大の勉強ぎらいで、いつも近くの山や川で遊びほうけている。

「カズ、夏休みの宿題は進んでいるの？」

とつ然、お母さんが俺の部屋に入ってきた。もちろん、宿題なんてやってあるはずはない。

「今日はお母さんが見張っているから、ちゃんと宿題をしなさい！」

「いやだ！　勉強なんかキライだ！」

俺は家から飛び出して、裏山へ走って行った。後ろをふり返るとお母さんはいない。俺は一安心した。

裏山ではいつも木に登って遊んでいる。ここからは、俺の住んでいる町が見える。遠くの方には海や島、港が見える。ここでいろいろな景色を見ていると、心が安らかになってくるんだ。

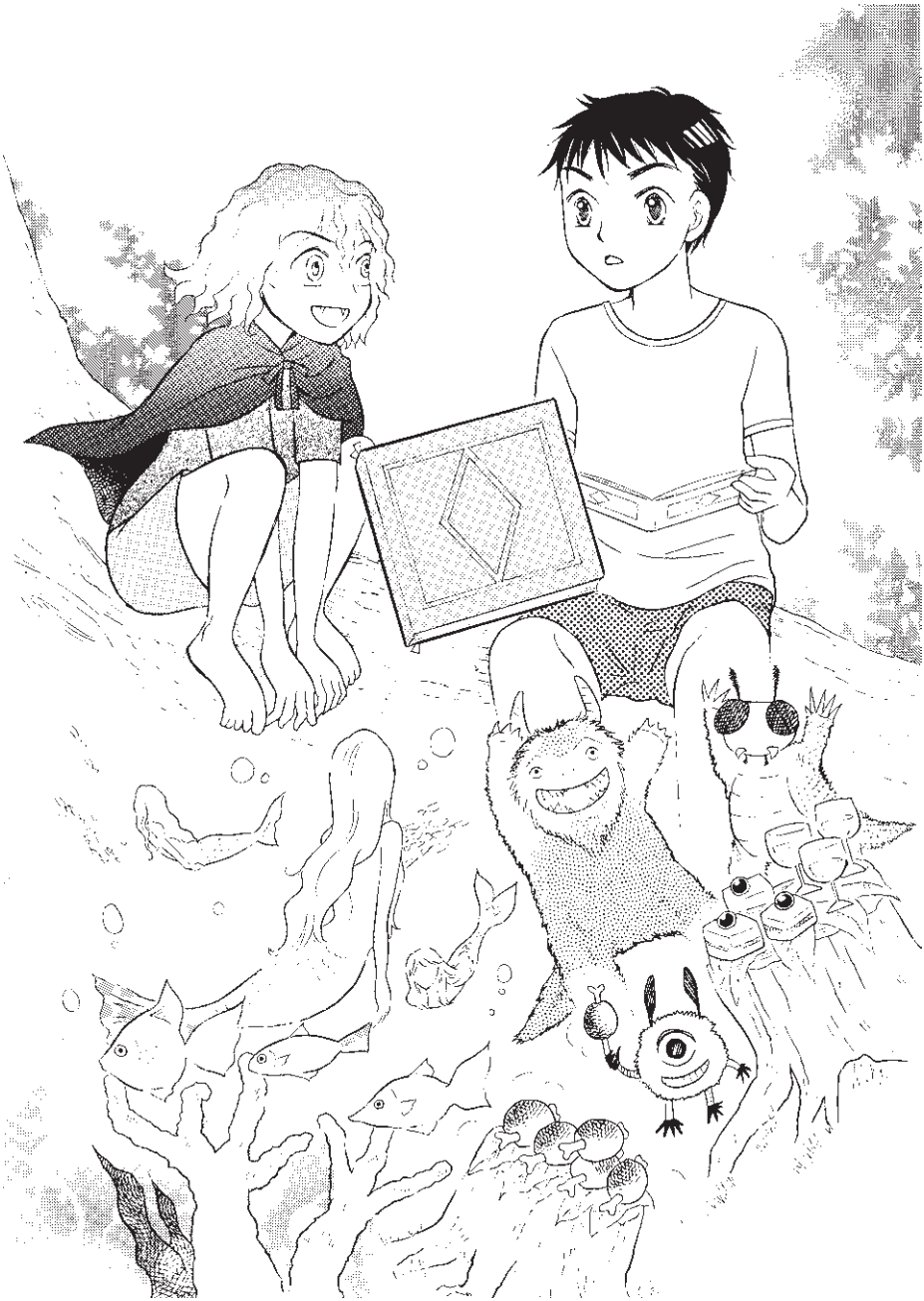
「あれ？」

俺は木の枝に引っかかっている何かを見つけた。どうやら絵本のようだ。手をのばして取ってみた。茶色い表紙にダイヤ形の黄色いラインが描かれている。最初のページを開いてみた。左上に『森のページ』とタイトルが書かれている。見たこともない木や花に囲まれて、たくさんの妖精が描かれている。妖精たちは楽しそうに踊ったり、食べたりしている。ページをめくると、次は『海のページ』だ。見たこともないカラフルな魚やサンゴに囲まれて、たくさんの人魚が楽しそうに泳いでいる。

「おいらの本を勝手に見るな！」

頭の上から男の子の声が聞こえてきた。俺はびっくりして声のする方を見上げた。木の枝に一人の少年が座っている。髪は緑色で海草のようにうねうねし、赤い服に茶色い短パン、紫のマントを身につけている。ニッと笑った口元からはドラキュラのようなとがった歯が見える。俺は、びっくりして木の上から降りようとした。

「怖がらなくていいぜ」
少年が話しかけてきた。
「おいら、ティロ。魔界からやってきたんだ。何も悪いことはしないから、少し話をしないかい？」
ティロは俺の方に近づいてきた。よく見ると格好は変だが、顔はかわいらしい。俺より年下にも見える。
「俺は和正……」
「和正、さっきお母さんとけんかしてただろう」
俺はすごくおどろいた。
「おいらは、勉強がきらいで、遊び好きな子どもの味方なんだ。だから、君を魔界からずっと見ていたんだ」
「ティロ、これは何の本なの？」
俺は持っている絵本のことを尋ねた。



「君は妖怪が好きか？　怖くないか？」
「へっちゃらさ。どんな妖怪だって怖がったりしないよ」
「そうか、それならこの本の中に入っても平気だな」
「え、どういうこと？」
俺は何のことか理解できなかった。
「ともかく入ってみるか？　最初のページを開いてくれ」
俺は言われたとおりに絵本を開いてティロの方へ向けた。次の瞬間、周りに雷が落ちたかのようにピカッと光り、体が本の中に吸いこまれていった。
「和正！」
俺を呼ぶ声で目が覚めた。目を開けるとティロが俺の顔をのぞきこんでいた。
「不思議の森に着いたぞ」
起き上がって辺りを見回すと、さっき絵本で見たとおり、不思議な形をした木や花でいっぱいだ。近くでたいこや笛の音がする。まるでお祭りをしている

みたいににぎやかだ。

「行ってみようぜ」

ティロに誘われて、俺は音のする方へ走って行った。そこでは、たくさんの妖怪が楽しそうに音楽を演奏したり、踊ったりしている。木の切り株にはたくさんのご馳走が並んでいる。

「和正も踊らないか？」

ティロに手を引っぱられて、俺は妖怪達の中に入っていった。周りの妖怪は、特に俺達を気にするようでもない。俺はティロと踊った。とても楽しかった。踊った後、ご馳走を食べることにした。見たことのない食べ物だったが、おなかがすいていたのでいっぱい食べた。とてもおいしかった。

勉強せずにずっと遊んでいられるなら、一生ここにいてもいいかも……。そう思いながら不思議の森でティロと過ごした。

「今度は海に行ってみないか？」

ティロが話しかけてきた。不思議の森の居ごこちはよかったが、海にも行ってみたい気持ちになったので、

「じゃあ、そうしよう」

と俺は返事をした。★

海に着いた。二度目だから移動にもなれてきた。海はエメラルドグリーンだ。海をのぞくと海草がゆれておどっている。

「海に入ろうぜ」

ティロにさそわれて、俺は海に飛び込んだ。すると、人魚たちがやってきた。人魚の目もエメラルドグリーンだ。人魚は、俺に水の中でも息ができるマントを貸してくれた。

（ずっと時が止まって遊べたらいいのに……）俺はそう思った。

そして、泳ぎ疲れた俺は、ティロに聞いた。

「なあ、ティロ。他にも楽しいページある？」

「あるけど……」
「あるなら、すぐに行こうよ。早く早く」
ということで、俺達は『地底のページ』へ行くことにした。でも、ティロはなぜ「あるけど……」なんて言ったんだろうか。
「和正。ここからは、新しいページだ。地下に行くぞ」
ティロはそう言うとページをめくった。海が消えて、あたり一面には、段になっているかべのようなものが現れた。
「ティロ、あれは何？」
と、俺は聞いた。
「あれは地層だよ。このことについて、もっとくわしく知っているやつがいるから、会ってみるかい」
と、ティロが言った。俺は、あまり勉強はやりたくなかったけれど、ティロに会ったように、その人にも会いたい気持ちになった。

俺がそう言うと、ティロはおもむろにポケットから棒のようなものを取り出し、何かを言いながらそれをたてにふった。
「それは何？　ティロ、うわあああああ!!」
俺とティロは、まっさかさまに落ちていった。
目がさめると、辺りはうす暗く、いろいろな化石が壁にくっついていた。
「ここはどこ？　どこにその人はいるの」
ティロは、手に持っていた棒をまたひとふりして、
「この化石たちだよ」
と言った。俺は、何のことか分からなかった。
その時、壁にくっついていた化石が急に動き始めた。俺は、あわてて逃げようとしたが、足がすくみ動けない。すると、その化石がしゃべり始めた。
「やあ、和正。よく勉強する気になったな」
俺は、びっくりした。動いただけでもこわかったのに、しゃべるなんて……。

でも、よく考えると、妖怪や人魚が出てきたりと、ここは不思議なことだらけだ。

「君の名前は？　なぜ俺のことを知っているの」

と聞いた。すると、その化石は、

「君のことは、前から知っているよ。あと、ぼくの名前は、ティラノサウルス。Tレックスと呼んでくれ」

あの恐竜ティラノサウルスと話しているのか。

「Tレックス。俺に恐竜のことを教えてくれ。夏休みの自由研究で恐竜を調べたいんだ」

俺は、これまで勉強はきらいだったのに、恐竜のことを知りたくなってきた。

「わかった、和正。教えてあげよう。化石ってどうやってできるか知っているか」

「えっ、知らない」

「化石は、生き物や生き物の足跡、住んでいた跡などの上に土砂が積み重なって、石になったものなんだ」

知らなかった。化石ってそうやってできるんだ。何だかこうやって学ぶのは楽しいと、俺は思った。

「じゃあ、この色の違う線の入った壁は、何なの？」

俺は、壁を指さして聞いた。

「地層といって、砂や泥、小石などが積み重なって、できたものなんだ」

俺は、学ぶのが本当に楽しくなってきた。ティロが、楽しいかとたずねたので、俺は、率直に楽しいと答えた。それを聞いたTレックスは、俺に手のひらくらいのアンモナイトの化石をくれた。

ここで、俺は、ティロが悲しそうな顔をしていることに気がついた。

「ティロ。なぜ悲しい顔をしているんだい」

「この本がそろそろ終わりになるからなんだ。そうすれば、和正とはお別れだ」

俺は、びっくりした。
「でも、俺はティロのことを忘れないよ」
「そう言ってくれてうれしいよ」
そういっている間に、最後のページが来てしまった。
「さようなら、和正。また遊ぼうな」
視界が、真っ白になった。
「ティロ」

俺は、裏山の木の下で寝ていた。ティロは？　と見渡したが、誰もいなかった。でも、絵本とアンモナイトの化石はあった。絵本を開いてみると、ティロの姿が描かれていた。
俺は、本の中に入っていたんだ。
家に帰ると、お母さんがいた。

「これから勉強するよ」
と言うと、お母さんは驚いた。
そして、
「なつかしいわ。この本、今もあったんだ」
と言った。
俺は、部屋に入り、化石や地層についてまとめ始めた。絶対に絵本の中での出来事を覚えていようと心に決めながら……。

あとがき

今年も各務原市と敦賀市の児童が、互いの思いを文章で綴り・紡ぐ作業の結晶であるリレーメルヘンが完成しました。今年で十二冊目となります。十二年間とは、小学校の卒業生を二度送り出していることとなります。こうした時間（とき）の中で、年輪のように積み重ねられたものが十七編の作品に織り込まれています。

今年は、前半を敦賀市の子どもたちでスタートし、後半を各務原市の子どもたちがバトンを受けました。お互いの思いを感じ取りながら協働で一つの作品を創り上げました。一編一編から子どもたちの感性の素晴らしさがにじみでています。また、創作すること自体を楽しみながら書いているそんな喜びも感じました。現代の日本では、大人も子どもも「活字離れ」が進んでいると言われますが、少なくとも作者の皆さんからはそのようなイメージは感じられませんでした。

空想的な物語であるメルヘン。むしろ、自分のイメージを膨らませて、どのようにすれば読む人に自分の思いが伝えられるかというエネルギーを感じ取ることができました。

こうしてできあがった作品を、両市の子どもたちが読むことで、さらに心やさしく、元気に満ちた人になってくれることを心から願っています。

最後になりましたが、このように素晴らしいリレーメルヘンの完成までに関わって下さった各務原市と敦賀市の図書館の皆様と各学校の先生方に、心からお礼を申し上げます。そして、作者である子どもたちにも敬意を表したいと思います。

敦賀市小学校教育研究会学校図書館部長　　岸上昌清

わきあがるメルヘンの世界

メルヘンは、英語ではフェアリーテイルと呼ばれ、自由な書き方で空想的に書かれた物語のことをいいます。日本では童話を含むおとぎ話として親しまれています。このメルヘンを敦賀市と各務原市の子どもたちがつないで創り上げる「リレーメルヘン」が十年以上も続いているのですが、いったいそれはなぜでしょう。

一つには、子どもたちが無限の夢をもっており、それを自由に表現できるものがメルヘンだからではないでしょうか。わきあがる発想は、情熱や期待となり、非現実的なことがいつかは現実になるかもしれない、そんな想いさえ感じさせてくれます。今年も、笑いあり、ちょっぴり涙ありの感動作品に出会い、十七作品すべてに通う「心」に気がつくことでしょう。毎年さまざまなメルヘンが生み出されますが、ひとつとして同じものはありません。ここに「おもし

ろさ」があるのです。

そして、両市の子どもたちがこの事業を通して、心を通わせることができるということも忘れてはなりません。自分が描いたストーリーがどうなっていくのだろう、前半の内容を書いた人はどんな想いだったかしらと考えます。その関わりを大切にしながら、登場人物、動物、架空のものたちが生き生きと話し、動き回ります。作品を創り上げた者同士が実際に出会い、そのことで人間交流ができるリレーメルヘンの「よさ」は価値あるものです。

子どもたちの想いが作品としてできあがりました。ここに至るすべての子どもたち、そして敦賀市と各務原市の図書館関係の方々、各小学校の先生方と見守っていただきました保護者の皆様に、心より感謝申し上げます。

各務原市立八木山小学校長　藤澤尚樹

あとがき

各務原市と敦賀市は、一九八九年(平成元年)十月に友好都市盟約を締結し、既に二三年が経過いたしました。この「リレーメルヘン」は、両市児童の友好の輪が更に深まることを願って、二〇〇一年から企画されたもので、本年第一二集目の発行を迎えることができましたことを深く感謝申し上げます。

全一七作品を読むと、大人には考えのつかない、夢の世界に誘い込まれてしまい、勤務時間中ではありましたが、楽しい半日を過ごしてしまいました。子どもたちの持つ想像力の豊かさとたくましさに驚嘆するばかりであります。

これからも各務原市と敦賀市の交流がいろいろな分野で更に深まり、末永くお付き合いができますことを願っています。

今回のリレーメルヘンに参加して素晴らしい作品を書いてくださった小学生の皆様、ご指導いただきました先生方、作品集の発行にお力添えくださいました関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

敦賀市立図書館長　木村一也

あとがき

辞書で『メルヘン』を調べると、「おとぎ話、昔話、童話、妖精・小人・魔法使いなどが活躍する空想的な物語」と書いてあります。

つまり、現実ではありえないようなことが「メルヘンの世界」ではできてしまい、メルヘンは、書く人も読む人をも、わくわくドキドキさせてくれます。

今年は、敦賀市十五小学校の児童四十五人の「メルヘンの世界」を各務原市の児童に託し、各務原市十七小学校の児童五十四人がそれを受け継ぎ、新たに十七のメルヘンが完成しました。

どのメルヘンも、子どもたちの夢や思いが込められ、新鮮な感性と想像力が満ち溢れ、知らず知らずのうちに「メルヘンの世界」へ引き込まれてしまう作品です。

十七の作品に挿絵が加わり、表紙ができ冊子として編集されると、児童たち

に新たな感動が生まれることでしょう。

また、児童交流会では、両市の児童が初めて顔を合わせ、それぞれの思いを語り合い、新しい交流が始まることでしょう。

「リレーメルヘン」が、参加児童の「文学」への関心を高めるきっかけになり、いつまでも忘れることなく、未来に繋がる貴重な経験と財産となり、素晴らしい出会いの場となることを願います。

友好都市である両市にとりましては、子どもたちは勿論、私たち関係者の交流の機会となり、友好の輪がますます大きく広がることを願います。

最後になりましたが、「リレーメルヘン」参加児童の皆さんと保護者の皆様方、そして、ご指導いただきました先生方、挿絵など冊子編集にお力添えいただきました方々に、心からお礼申し上げます。

各務原市立中央図書館長　関　紀子

リレーメルヘン⑫
虹色の幸せ

2012年11月30日発行
発行者　各務原市立中央図書館
発行所　各務原市立中央図書館
各務原市那加門前町3-1-3
TEL.058-383-1122
http://www.city.kakamigahara.lg.jp/toshokan/

絵：ぐりの大冒険